

41465

教科書文庫

4
810
41-1938
200030 1689

194  
1901

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

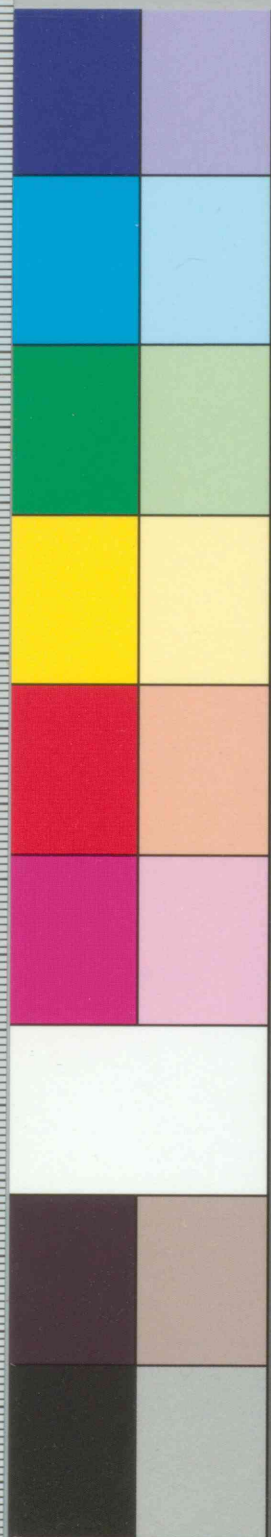
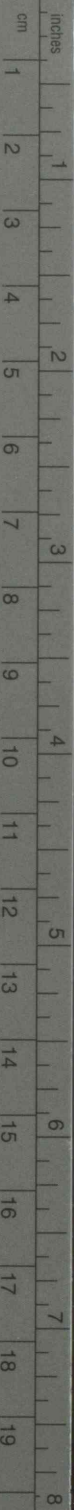


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
TolD  
資料室

新制國語讀本

新教授要目準據

卷六



資料室

375.9  
T010

昭和三十二年二月一日  
文部省檢定  
中學國語教科用

學習院教授 東條操編

新制國語讀本 卷六

新教授要目準據

東京 三省堂  
大阪



(照參課九第) 塔重五寺隆法

廣島大學圖書印



卷六 目次

一星の光	山本一清	一
二相模灘の落日	徳富蘆花	五
二歌話		九
一秋の青柳		九
二能因法師		一〇
四童心童眼	吉田絃二郎	一二
三薄の穂	(諸家)	二三

六 空ゆく雁

(會我物語) 二五

七 舊都の月

(源平盛衰記) 三〇

八 法隆寺の印象

和辻哲郎 三四

九 塔影

河井醉茗 四四

一〇 建築の美

松本亦太郎 四七

一一 つれぐ草抄

吉田兼好 五四

一 石清水

二 かなへ

三 此の木なからましかば

四 猫また

五 高名の木のぼり

大西祝 六〇

金子元臣 六九

(諸家) 七五

(編者) 八一

五十嵐力 八四

藤岡作太郎 九一

相馬御風 九八

貝原益軒 一〇七

一六 明と浄と直と

一七 國民の特性と自然

一八 冬から春へ

一九 春興

- 二〇 扇の的
- 二一 ほまれ
- 二二 戯作三昧
- 二三 芳流閣
- 二四 知己難
- 二五 長柄堤の訣別
- 二六 現代青年に望む

- (平家物語) 一二二
- 芥川龍之介 一三〇
- 瀧澤馬琴 一三〇
- 徳富猪一郎 一三七
- 坪内逍遙 一四三
- 瀧澤榮一 一五一

— 目次 終 —



### 新制國語讀本 卷六

#### 一星の光

山本一清  
 理學博士。天文  
 學者。滋賀縣の  
 人。明治二十二  
 年生。

星の光は、これを仰ぎ見る人の心に眞摯の情を養ひ、又その整然たる運行は、これを知る人の胸に嚴肅の思ひを喚びおこすものであるが、大星小星の神祕的な配列によつて誘はれる星座の親しみは、吾人に眞の美と眞の愛とを味ははせる。天は偽り無きもの、嚴かなるものであるを知ると共に、星の輝きが誠に愛すべきものであると感ずる幸福は、星好きの者に與へられた特權である。星を見ることの楽しみは、洋の東西や邦の如何によらない。又老幼の差や、男女の別によつても違ふものでない。凡そ如何なる

一星の光

人々の間にも、同じ星を愛する心を持つことによつて、喜ばしい友情を結ぶことが出来る。

テニソンの詩の中に、

幾晩もく、向うの藤のからんだ窓のなたか  
ら、私は休みの床に入る前に、大オリオンが靜に  
沈みゆくのを見たことがある。

幾晩もく、よく澄んだ暗黒から上つてくるブ  
レヤデスが、銀の紐で結ばれた螢の一團のやう  
にちらついてゐるのを見た。

とあるのは、吾々も詩人と感と同じうするところである。

更に又、印度の詩聖タゴールが「春の周轉」の中に、

眞夜中に星々が、  
空に浮ぶは何のため。

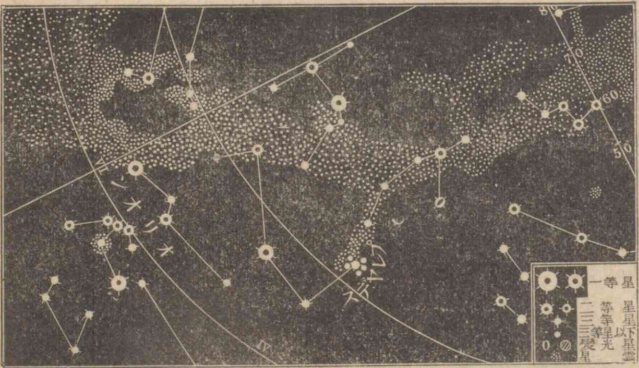
テニソン  
イギリスの詩  
人(西紀一六元一  
元七)

オリオン  
星座の名。

ブレヤデス  
星團の名。和名  
すばる。

タゴール  
インドの詩人。  
哲學者。西紀一  
八六〇年生。

こちの世界へ歸つて來い、  
街の燈火にしてやらう。



座ンオリオ 團星スデヤレブ

と歌つた心は、小兒の心のみでなく、大人  
の心をも動かすに充分である。

見る眼を以て見れば、星には心がある。  
輝きの大小、色調の青赤など、恰も笑ふが  
如く、泣くが如く、嚇すが如く、怒るが如く、  
更に又、媚びるが如く、慕ふが如きものも  
ある。殊にちらく、と閃きの速さ緩か  
さを眺めると、或時はそれが跳るかのや  
うに、又或時は見る者に喃々と話しかけ  
るかのやうである。

純潔と崇高とは、星の光の持つ魂であ

Orion Pleiades

一星の光

自今人の感しをす  
て相子にほかに  
見る子かた  
海を舟人し  
見や

エマソン  
アメリカ合衆國  
の詩人。哲學者  
(西紀)一八三二—一八  
九二

文豪家  
すい、感もをばか

る。見る人の心を、これによつて淨化せずには止まない。こゝに  
眞の美が生れる。美とは客觀のみではない。又、主觀のみではな  
い。主と客と(心と星と)相結んでこそ、美の精を産むものと言はね  
ばならない。

エマソンの言に、若し星が千年に一夜だけ現れるものならば、こ  
こに表された神の都の記憶を如何に人々は信じ、あこがれ、又後の  
世の代々まで傳へることであらう。」とある。毎夜見得るが故に  
美を感じないとしたならば、それは人の心のゆるみである。文人は  
これを、「神を瀆すもの。」と言ふのであらう。

(星座の親しみ)

みづの折神作中の村家とす。一切の外海平

徳富蘆花  
名は健次郎。小  
説家。熊本縣の  
人。昭和二年歿、  
年六十。

二相模灘の落日

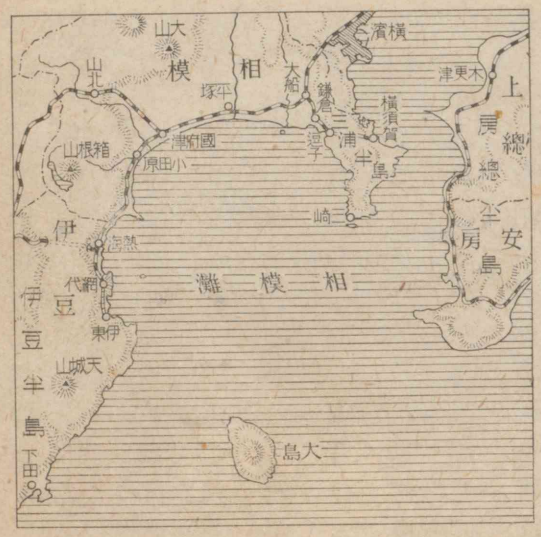
徳富蘆花

秋冬、風全く風ぎ、天に一片の雲なき夕、立つて伊豆の山に落つる  
日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとも思はれず。

日の山に落ちかゝりてより、そ  
の全く沈み終るまで、三分時を要  
す。

初め日の西に傾くや、富士を始  
め相豆の連山は煙の如く薄し。  
日は謂はゆる白日、白光爛々とし  
て眩しきに、山も眼を細うせるに  
や。

日更に傾くや、富士を始め相豆



二相模灘の落日



の連山次第に紫になるなり。日更に傾くや、富士を始め相豆の連山紫の肌に金煙を帯ぶ。

此の時濱に立つて望めば、落日海に流れて、吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯、山といはず、砂といはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざるはなし。

かゝる風夕に、落日を見る身は、恰も大聖の臨終に待するの感あり、莊嚴の極、平和の至、凡夫も靈光に包まれて肉融け、靈獨り端然として永遠の濱にイむを覺ゆ。

物あり。融然として心に浸む。喜びといはんは過ぎ、哀しみといはんは未だ及ばず。

已にして日愈落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちにして印度藍色に變ず。唯富士の巔、舊によつて紫上更に金光を帯ぶる。

indigo

逗子  
神奈川県三浦郡  
逗子町



のみ。

伊豆の山已に落日を銜みそめぬ。

日一分を落つれば、海に浮べる落日の影一里を退く。

日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧みがちに悠々として落ちゆく。

已にして残り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘦せて點となり、——忽ちにして無し。

眼を上ぐれば世界に日なし。ひかり消えて、海も山も蒼然として憂

無し。

華

相模灘の落日

1246-1276  
華  
孝  
信

ふ。  
日は入りぬ。かもし餘光の忽ち箭の如く上射し、西空金よりも  
黄なるを見ずや。偉人の歿後、實にかくの如し。  
日の落ちたる後は、富士も程なく蒼ざめ、やがて西空の金は朱と  
なり、燻りたる樺となり、上りては濃き孛藍色となり、日の遺華とも  
思ふ明星の次第に暮れゆく相模灘の上に眼を開きて、明日の出口  
を約するが如きを見るなり。

(自然と人生)

華  
道

花園大臣  
白河天皇の皇  
孫、左大臣源有  
仁。

三歌話

一秋の青柳

花園大臣の御許に、始めて参りたる侍の名簿のはし書に、「能は歌  
よみ。」と書きたりけり。大臣、秋の初に南殿に出でて、はたおりの  
鳴くを愛でておはしましけるに、暮れければ、下格子に人参れ。」と  
仰せられける。「藏人五位たがひて、人も候はぬ。」と申して、此の侍  
の参りたるを、唯おのれおるせ。」とありければ、まゐりたるに、「汝は  
歌よみとな。」とありければ、畏りて、格子おるしさして候に、「此のは  
たおりをば聞くや。一首つかうまつれ。」と仰せられければ、「青柳  
の」と、五文字をいだしたるに、候ひける女房たちをりにあはずと思  
ひたりげにて笑ひ出でたりけるを、物を聞き果てで、笑ふやうやは  
ある。」と仰せられければ、

三歌話

九

新考かきし持の手巻

絲一巻

劇

春夏秋

青柳のみどりの絲をくりかへし

夏へて秋ぞはたおりはなく

と詠みたりければ萩おりたる直垂を押出して賜はせてはけり。

寛平の歌合に、初雁を友則

春霞かすみて去にし雁がねは

今ぞなくなる秋霧の上

と詠める、左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人

人こゑぐに笑ひけり。さて次の句に、霞みて去にし。といひけ

るにこそ音もせずなりにけれ。物を聞きも果てず、ひたわさに笑

ふことあるまじき事なり。

二能因法師

能因入道、伊豫守實綱に伴ひて、彼の國に下りたりけるに、夏の初

日久しく照りて、民の歎き浅からざるに、神は和歌にめでさせ給ふ

寛平 第五十九代宇多天皇の御宇の年

友則 紀友則。古今集撰者の一人。

十訓抄 三卷作者未詳。鎌倉時代のもの。近古の小説を集めた教訓書。

能因入道 俗名は橋永愷。歌僧。白河天皇(第七十二代)頃の人。

三島 三島神社。伊豫國(愛媛縣)宇摩郡三島町に在る。

貞觀の帝 唐の太宗。貞觀は年號。

白河の關 福島縣西白河郡古關村に在る。

古今著聞集 二十卷。橘成季の著。古今の逸事・巷談を集めた小話集。

ものなり、試に詠みて三島に奉るべき由を、國司頻りに勧めければ、あまの川苗代水にせきくだせ

天くだります神ならば神

と詠めるを、御幣に書きて神司して申し上げたりければ、炎旱の天

俄に曇り渡りて、大いなる雨ふりて、枯れたる稲葉、緑に復りけり。

忽ちに天災を和ぐる事、唐の貞觀の帝の蝗をのめりける故事にも

劣らざりけり。此の入道は至れるすきものにてありければ、

都をば霞とともに立ちしかど

秋風ぞ吹く白河の關

と詠めるを、都にありながら、此の歌を出さむこと念なしとおもひて、人にも知られず、ひさしく籠りて、色を黒く日にあたりなしてのち、陸奥の國の方へ修行のついでに詠みたりとぞ披露しはべりける。

(古今著聞集)

四童心童眼

吉田絃二郎

吉田絃二郎  
名は源次郎。小説家。早稲田大學講師。佐賀縣の人。明治十九年生。

人間といふ自分自身の姿、自分の心の姿を靜に見つめるといふことは、私たちの生活にとつて最も大切なことである。大抵の人は日々夜々の激しい勤めの爲に、自分自身の心の姿をじつと見つめる機會といふものを、餘り持ち得ないやうである。またそのやうな機會を持たうと心がけてゐないやうである。

今日では殆ど繪の上のありふれた構圖になつてゐるが、古い傑出した作品のうちに、私たちはよく一羽の白鷺が水のほとりにつくねんと佇んで、自分の姿を水に映して眺め入つてゐるのを見る。繪畫上の單なる構圖としても面白い古雅な味はひのある形である。限りもなく廣い靜な水の上には、何一つさへぎるものもない。そこには何も無い。空無の世界のみがひろげられてゐる。その

構圖

絶對無

何も無い空無の世界の眞中に、たゞ一羽の白鷺のみがじつと靜に水の上の一點を凝視してゐる。絶對無の境に置かれた、たゞ考へるところの一つの存在である。



鷺圖 (狩野古信筆)

かう考へてくると一羽の白鷺の圖もなかく、味はひのある聯想を與へてくれる。我々個々の人間は一つの考へるところの存在である。絶對無の境に置かれた一羽の白鷺である。あのたゞ一羽の白鷺が水のほとりに佇んでゐる姿には何となしに尊い味

搏 搏

はひがある。と同様に、たゞ一人靜に自分の心の姿を見つめてゐる人々の生活にも、尊い味はひがある。

歌を詠むこと、俳諧を楽しむこと、繪を書き、音樂を聴くこと、すべての藝術なり、哲學なりを味はふといふことも、畢竟は靜に自分の心の姿を見つめたいが爲である。

たとへば一叢の蘭の葉を描くとする。墨の濃淡筆の勢にもその刹那の自分自身の心の姿があらはれてくる。お茶を立てるとする。一碗の茶の味はひの中にも自分の心の影がはつきりと映つてくる。ピアノの前に腰をおろして鍵を打つ。たゞ一つの音にも自分の心臓の脈搏が傳はつてくる。自分の心が曇つてゐる際にはピアノの音が曇つてくる。

私たちの心には形はない。けれども心の内のひらめきは、いろいろな形となつて外部にあらはれてくる。その外部にあらはれ

ベートーヴェン  
ドイツの音楽家  
(西紀一七三二—一八二七)  
近松門左衛門  
號は巢林子。淨  
瑠璃及び狂言作  
者。享保九年三  
元巳歿、年七十  
二。

下 凡  
根 夫

て來たいろく／＼な尊い形を通して、私たちは人間の心の尊さ、深さ、有難さを想像することが出来る。ベートーヴェンの音樂を聴く時に、或は近松門左衛門の作品を読む時に、私たちは確に人間の心の深さについて、嚴肅さについて、高さについて、或は寂しさについて考へざるを得ない。そこには私たち自身の心の姿の深さも、嚴肅さも、哀れさも、尊さもその儘に映し出されてゐる。

人間が生きてゐる意義を人類全體の幸福の爲であるとか、かういつた風にきめてしまふ人がある。確にさうであるかも知れない。もしそれで満足出来る人はそれで満足するがよい。けれどもこのやうな人生の見方は動もすれば餘りに大ざつばな掴み方に墮ち易い。疎雑である。餘りに頼りどころがない感じがする。偉大な人、偉大な宗教家といふやうな人にはそのやうな悟も出来るであらうが、もと／＼凡夫下根の身には、そのやうな悟はなかな

發菩提心

老病死苦  
愛別離苦  
怨憎會苦  
不取捨苦  
五陰盛苦

四童心童眼

か出來さうもない。釋迦のやうなえらい方でも發菩提心の原因は老病死苦の歎きにあつた。老病死苦の歎きはつまり私たち凡夫下根の歎きそのものである。何故に人は老い、人は病み、人は死するかといふ歎きは、私たちを驅つて靜に人間の運命について考へさせる。人間の心の姿を見つめさせようとする。釋迦の結跏趺坐の苦行は要するに私たちが靜に自分の心の姿を見つめようとすする努力に過ぎない。

恐れるが故に生について考へる。また死についても考へる。人間の運命を、人間の心の姿を見つめようとする。菩提の光を求めようとすする。死を恐るゝが故に、死を悲しむが故に、私たちは生きてゐるこの現在の有難さを心ゆくまで味はひたいと思ふ。私たちは生れた時、一文の値をも拂ふことなくして生れて來た。しかも、私たちはそこに値踏みすることの出來ないほど尊い人間の心を惠まれて來た。そこには、また一文の値を拂ふことなしに太陽を惠まれ、微風を、鳥の聲を、雲の色を惠まれ、青空を惠まれてゐる。

生きてゐる間に私たちは自然によつて惠まれた太陽と、青空と、微風と、鳥の聲と、波の音と、夕燒の空とを貪りつくすほどの心で味はつて見たい。西行といひ、芭蕉といひ、一生を家もなく送つたのはその爲ではなかつたか。彼等は家をも土地をも持たなかつた。然し、吉野山の櫻も、石山の月も、鴨立つ澤も、象瀉の合歡の花も、日本國中の山も川も、西行のものであり、芭蕉のものであつた。すべてのものを捨てて、天地といふもののふところに一身を委ねてしまつたからである。

私たちは芭蕉や西行のやうに、家を捨てて自分ひとり歩いてゐるわけにはゆかないかも知れぬ。然し心持だけは眞似て見た

西行

俗名は佐藤義清。歌人。鳥羽上皇の北面の武士であつたが、後出家して西行と號した。建久元年(一一九〇)歿。年七十三。

芭蕉

姓は松尾、名は宗房、俳人。伊賀國三重縣の人。元禄七年(一七〇〇)歿。年五十一。

石山

滋賀縣滋賀郡石山町に在る石山寺。石山寺の秋月は近江八景の一。

象瀉

羽後國(秋田縣)由利郡、鳥海山の西北麓に在る。

合歡の花



四童心童眼

一七

佛の心は自ら心か  
悟る心は自ら心か  
一六

釋迦  
老病死苦  
愛別離苦  
怨憎會苦  
不取捨苦  
五陰盛苦

## 闌 干

い。殊に目まぐるしい近代の都會生活を送つてゐる人々にとつては、一層この心がけは必要なことであると思ふ。

數年前である。私は二箇月ばかりいろく、忙しい仕事の爲に、夜も晝も追ひまはされてゐたことがあつた。ある秋の夜であつた。私はそのころ勤めてゐたある場所から、夜ひとりで暗い夜更けの町を歩いて來た。私はふと崖を見上げた。そこには無数の星が闌干としてさゝやいてゐるのであつた。

私はその時、あゝ空があつた、星があつた、といふことを今更のやうに感じたのであつた。

花を愛することの出來ない人間は俗人である。一株の木を愛することの出來ない人、小鳥の鳴く音に心をすますことの出來ない人も俗人である。あの黒い冷たい何のかざりもない塊の中から、可憐な一莖の花が咲いて出るといふこと、たゞそれだけの事實

のうち驚嘆すべきある物があるのではないか。私はどのやうな學者であらうと、宗教家であらうとも、もしその人が夜の空にあらがれることを知らず、一莖の草花に見入ることもせず、一枚の草の葉に驚きを感じることをしたかつたとしたら、さういふ人を尊敬すべきであらうか。この世界に親があり、子があり、妻があり、友人があり、更に雲があり、草の花があり、青い木の葉や、さゝやかな雨の音があるといふだけで、もう私たちの人生は恵まれてゐるのではないか。死ぬことは悲しいが、私たちはこのやうな恵みを曾てもち、現在もちつゝありといふことを考へただけでも、生れて來たことを感謝しなければならぬ。

饒舌な人と半時語つてゐるのは随分つらいものである。そして何も得るところはない。縁日で買つて來た廉い一鉢の花とならば、一日對座してゐても飽きはしない。何ともいへぬ心の歡び

を見出す。芭蕉は俳談の外、談ずべからずといつた。私たちは出来るだけ沈黙を守つてゐたいと思ふ。そしてつと／＼親切な眼で人生を自然を観たいと思ふ。おしやべりをしてゐる間は心は眠つてゐる。

哲學といひ、宗教といひ、文藝といひ、つまり親切な眼で人生なり自然なりを観るといふことに他ならぬのである。

私はこのごろ庭の山茶花が疲れて來たので、郊外の麥畑へ頼んで植ゑかへてもらつた。麥畑へ行つて山茶花を見ると驚いた。幹も葉も眞黒である。今まで庭前に置いてゐる間は山茶花の幹が、自然の色を失つてゐることに氣付かなかつたのである。私たち都會生活者の心もまたこの山茶花のやうに煤にけがされてゐるところがないか。私たちの嗜好や趣味は不健全になつてはゐないか。

## 感 觸

田舎に住んでゐる少年たちは山の水のうまさを知つてゐる。

土の香りの懐しさを知つてゐる。私たちは都會に住んでゐるが爲に人工的ないろ／＼な刺戟はもつてゐるが、山の水のうまさも、土の香りの懐しさも、山の空氣の感觸も忘れてしまつてゐる。不具の生活に生きてゐるが故に不具の刺戟を求めてゐる。

私は庭に雀のお宿をこしらへてゐるが、今ちやうど子雀が巢立つたところなので、毎日米をたべに子雀が集つてくる。大きな雀はとかく人を疑ふので、二三粒たべて飛んで行つてしまふから、大きな雀だけではなかく、米は減らない。子雀はまだ人を疑ふことを知らないのので、米を入れた籠の中へ四五羽づつはいりきりになつてたべてゐる。この子雀の何ものをも疑ふことを知らぬ風を見てゐると、實にいゝ心持である。

私たちの生活にも曾てはあんな時代があつた筈である。あゝ



いつた世界が、どうか私たちの社會にもとりもどされなければならぬ。

私たち自身の生活から、あの雀の素直な心を取りもどす必要がある。童のやうに悲しいことを悲しみ、嬉しいことを嬉しがり、慣ることを慣る人間が一番尊いのである。信じなければならぬものを信ずることが大事である。私たちはこの心を一番多く失つてゐるやうに思ふ。

童の素直な心で人を思ひ、童の素直な眼でもものを見るといふことが、藝術にもすべてのの人事にも一番大切であると思ふ。

(わが詩わが旅)

五 薄 の 穂

北 原 白 秋

北原白秋  
名は隆吉。詩人。  
福岡縣の人。明  
治十八年生。

ぼつくと雀飛び出る薄の穂日暮まぢかにながめて  
あれば

おのづからうらさびしくぞなりにける稗草の穂のそ  
よぐを見れば

ながれ来て宙にとままる赤蜻蛉唐黍の花の咲き揃ふ  
うへを

前田夕暮

名は洋造。歌人。神奈川縣の人。明治十六年生。

前田夕暮

裏富士の巨おほきななる影野におちてゆふべはるく秋風のふく

行けどく玉蜀黍の穂の光富士あらはにも夕焼した

長塚節

小説家。歌人。茨城縣の人。大正四年歿、年三十七。

長塚節

鴉のこゑ透りてひゞく秋の空にとがりて白き乗鞍を見し

若山牧水

名は繁。歌人。宮崎縣の人。昭和三年歿、年四十四。

若山牧水

葉がくれに紅の花ゆれるつゝ秋風しるきはちす葉の池

曾我物語

十二卷。著者未詳。曾我兄弟の復讐の顛末を記した物語。

六空ゆく雁

曾我物語

養和元年

紀元一八四一年

一萬箱王

工藤家次「祐家」

祐親 祐泰

祐成(一萬時致箱王)

母

名は満江。祐泰の死後、祐信に再嫁した。

曾我殿

曾我太郎祐信

工藤一蘭

工藤祐經

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年新玉の年立返り、一萬

は九つ箱王は七つにぞなりにける。或夕暮箱王は母の膝の上に

たはぶれながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。そ

の佛はいづくにましますぞや。往きて拜みたてまつらばや。母

御前、いささせ給へ」といひければ、遙に忘れたる來しかたも、今更

思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣くくのたまひ

けるは、あの曾我殿こそおのれらが父にてあれ」と心強くかたら

れけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、父御前は、まことやらむ、狩場より歸り給

ふ道にて、工藤一蘭とやらむに射られ死に給ひぬ」と、兄御前は語

らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る

この里  
相模國(神奈川  
縣)足柄下郡會  
我中村。



鳥類すら  
人倫

河津殿  
河津三郎祐泰。  
父だに。

時もあり伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さむと  
や思ふらむ。我等がこの里に在りと知らずや過ぐらむ。などお  
となしく語りければ母より始めて女房達迄皆袖をぞ絞りける。  
かくて夏も過ぎ秋も闌け九月十三夜の月隈もなかりけるに兄  
弟二人庭に出でて遊びゐたるに五つ連れたる雁がねの南をさし  
て飛びけるを見て一萬申しけるはあれ見給へ箱王殿空を飛ぶつ  
ばさも皆別のつばさぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中一  
つは父一つは母三つは子どもにてぞあるらむ。物いはぬ鳥類す  
らかくの如し。われらは人倫に生れながら和殿は弟我は兄母は  
まことの母なれども曾我殿は實の父にてましまさぬことこそ悲  
しけれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。父だに  
も世におはしまさば馬鞍をも賜り弓矢をも持ちて今ぞ思ふやう  
に物を射ありきなむ。われらより幼きものにてても馬鞍弓矢をも

遠侍  
明障子

て物を射ありくことの羨ましさよ。これらの事ども思ひ續くれ  
ばいつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。とて袖に顔  
を差入れてさめぬと泣きければ弟もこざかしく顔をあはせて  
泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きてあなあさまし人も  
こそ聞け。いかに和上藤達夜も更けぬるに左様にておはするぞ  
とくく入らせ給へ。と怖しげにいひければ二人の者は門外へ  
逃げ出でて思ふやうに飽くまで泣きて後に入りけり。  
或時兄弟は竹の小弓に薄矧の小矢を取添へて遠侍に出でてあ  
そびけるが明障子のありけるに二人たち向ひあなたこなたへ射  
とほして一萬箱王に申しけるはわれらもいつか成長し和殿は十  
三われは十五だにもなるならばいかならむ野山にてもあれ親の  
敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りてとにもかくにもなりな  
む。和殿も弓よく射習ひ給へわれも射習はむ。弓矢は男の一の

能にあるなるぞ。」といひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖しきことかなと人々思ひけり。

一萬が乳母、このよしを聞き知りて、大きに驚きて母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣くく語られけるは、まことか、おのれらがさも怖しき謀叛を起さむと議しあふなるは、もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれらが祖

父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館において失はれ給ひぬ。おのれらかゝる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉上の御敵に申しなして

失はるべし。その時、千たび百たび悲しむともかなふべきか。そのうへ汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿なげき申してとゞま

りたり。そのゆるは、鎌倉殿石橋山の合戦に打負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人心をあはせて助け奉

伊東入道  
名は祐親。

千鶴御前  
母は祐親の女。

松河が淵  
伊豆國(靜岡縣)田方郡伊東町に在る。

石橋山の合戦  
治承四年(一一八四)八月。

石橋山  
相模國(神奈川縣)足柄下郡に在る。

土肥の杉山  
土肥の山谷、石橋山の南に在る。

梶原景時  
頼朝の寵臣。

りし故に、駿河國八郡の大名になされしその御恩を皆返しまるらせて、二人の幼きものどもを助けて給はらむ。」と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、「それほど志ならば、二人の子供祐信に預くるぞ。」と仰せられけるゆるにこそ、汝等も安穩にて今まで稀有の命を保ちたるぞ。それにつきても、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡すべきか。鳥類畜類にても恩を知るところ聞け、況や汝等人倫に於てをや。しかるを、却つて曾我殿に歎きを與へんことかへすがへすも口惜しかるべし。その恩を報ぜむと思はば、速に謀叛をとゞむべし。」と口説きたてて誠められければ、二人の子供目と目とを見合せ、顔打赤らめて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬ所にては内々談議しけれども、人目に顯れては語り合ふ事もなし。母も内々怖しき者共の心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせむとぞ思はれける。(曾我物語)

七 舊都の月

源平盛衰記

源平盛衰記

四十八卷 作者未詳。二條天皇の應保中から、安徳天皇の壽永中まで約二十年間の源平二氏の盛衰を記したものである。

後徳大寺實定 建久二年(全) 歿年五十三

舊都

京都のこと。當時都は遷されて攝津國(兵庫縣)の福原に在った。

入道

平清盛

雀の松原

攝津に在った名所。武庫郡魚崎から深江邊の淡をいつたらしい。

みかげの松

今の御影附近の松をいふ。

布引

武庫郡布引山に在る。

後徳大寺の左大將實定は舊都の月をこひわびて、入道に暇を乞ひ、都へ上り給ひけり。元より心すき給へる人にて、浮世の旅の思ひ出に、名所々々を訪ひ見てぞ上られける。千代に變らぬ翠は雀の松原、みかげの松。雲居に曝す布引は、我が朝第二の瀧とかや。業平の中將のかの瀧に、星か河邊の螢かと、浦路遙に眺めけむ、いづくなるらむおぼつか。あな、湊の曙に、霧たちこむる昆陽の松かならず、春にはあらねども、山本霞む水無瀬川、男山に澄む月は、石清水にや宿るらむ。秋の山の紅葉の色、稻葉をわたる風の音、御身に浸みてぞ思しける。

さても都に入り給ひ、彼方此方を見給へば、空しき跡のみ多くして、たま／＼残る門の内、行き通ふ人もなければ、淺茅が原、蓬が柚と

業平

在原業平。右近衛中將。元慶四年(西)歿年五十四。

星か河邊の云々

「はる、夜の星か河邊の螢かも我が住む方のあまのたく火か。」(新古今集)

あな

兵庫縣川邊郡猪名川の河口

昆陽

同郡稻野の舊名。今大字に昆陽といふのが在る。

山本霞む云々

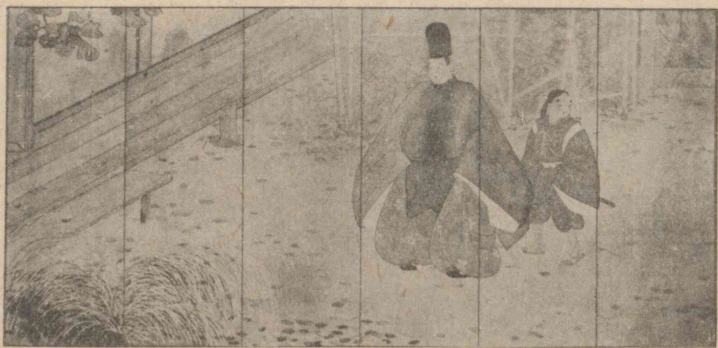
「見わたせば山も霞む水無瀬川ゆふべは秋と、なに思ひけむ。」(後鳥羽上皇、増鏡)

水無瀬川

大阪府三島郡島本村、山崎驛の南を流れる。

宮

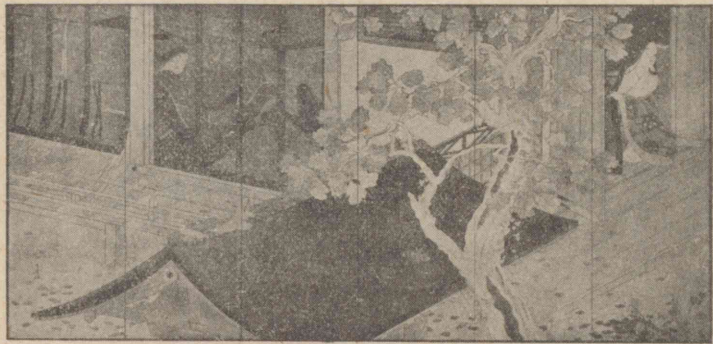
近衛天皇の皇后



筆陽南 乾 (一の共) 月の都舊

荒れ果てて、鳥の臥所となりけり。八月半ばのことなれば、まだ宵ながら出づる月、主なき宿に、獨り住み、をり知り顔に、鳴く雁の聲さへつらくぞ聞召す。大將はいと哀れに堪へずして、大宮の御所に参りかねて、心知れる某の侍従して、かくと申させ給ひければ、宮斜ならず御悦びありて、此方へ」と仰せけり。大將南庭を廻りて、彼方此方を見給ふにつけても、昔は百敷の大宮人にかしづかれて、明かし暮し給ひしに、今は幽なる御所の御有様軒に、蔦茂り、庭に千草生ひかはす。こと問ふ人もなき宿に、萩吹く風も騒が

霜草欲枯云々  
唐の白樂天が劉  
夢得に答へた詩  
の一節。和漢朗  
詠集、秋の部に  
ある。



筆陽南 乾 (二の其) 月の都舊

しく昔をこふる涙とや露ぞ袂を濡しける。時しあればと思しくて、蟲の怨もたえだえに、草のどさしも枯れにけり。大將哀れに心の澄みければ、庭上に立ちながら古き詩を詠じ給ふ。「霜草欲枯蟲思苦。風枝未定鳥栖難。」と宣ひて、それより御前に参り給ひけり。八月十八日のことなり。宮は居待の月を待ちわびて、御簾半ば巻き上げて、御琵琶をあそばしてわたらせ給ひけるが、山立出づる月影を、なほや遅しと思しけむ、御琵琶をさしおかせ給ひつゝ、御心を澄させ給ひけり。大將参り給ひければ、大宮は撥にて、それ

へ。と仰せけり。その御有様あたりを拂つて見え給ふ。互に昔今の御物語あり。大將は福原の都の住み憂きこと語り申して泣かれければ、宮は平の京の荒れ行くことを仰せ出して、共に御涙に咽ばせ給ひけり。かくて夜もいたく更けければ、后宮は御琵琶をかき寄せさせ給ひて、秋風樂を弾かせ給ふ。侍従は琴を弾きけり。大將は腰より笛を取出し、遙にこれを吹き給ふ。その後故郷の荒れ行く悲しさを、今様に作りて歌ひ給ふ。  
古きみやこを來て見れば、  
浅茅が原とぞ成りにける。  
月のひかりはくまなくて、  
あき風のみぞ身にはしむ。

と三遍歌ひ給ひければ、宮を初めまゐらせて、御所中に候ひ給ひける女房たちをりから哀れに覺えて、皆袂をぞ絞りける。(源平盛衰記)

和辻哲郎

文學博士。東京帝國大學教授。哲學者。兵庫縣の人。明治二十二年生。

法隆寺

奈良縣生駒郡法隆寺村に在る法相宗の本山。推古天皇の十五年（六〇六）聖德太子の建設にかゝり、我が國最古の建築である。法隆寺の停車場關西本線の一驛。

南大門

南大門に在る大門。永享十一年（一三九〇）の再建にかゝる。

中門

南大門の北方にあたる。推古天皇十五年の創建。

木下柰太郎

本名は太田正雄。醫學博士。文學者。東北帝國大學教授。岡山縣の人。明治十八年生。

### 八 法隆寺の印象

和辻 哲郎

朝から法隆寺へ出掛けた。いゝ天氣なので氣持も晴々としてゐた。法隆寺の停車場から村の方へ行く半里ばかりの野道の間は、遙に見える五重塔がだんく、近くなるにつれて、何となく胸の躍り出すやうな愉快な心持であつた。

南大門の前に立つともう古寺の氣分が全心を浸してしまふ。門を入つて、白い砂を踏みながら古い中門を望んだ時には、法隆寺獨特の氣分が力強く心を捕へる。そろく、陶醉したやうで、身體が浮動してゐるやうな氣持になる。

法隆寺の印象記は、印象が多過ぎるために、うまく書けない。まづ手掛りとして、木下柰太郎氏に宛てた古い手紙の一節を引用させて貰はう。

金堂

法隆寺金堂は推古天皇十五年の創建。

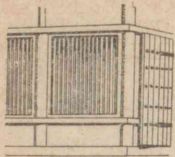
塔

法隆寺五重塔は推古天皇十五年の創建。

歩廊

法隆寺の歩廊は推古天皇十五年の創建にかゝり、一部は後年再建した。

櫺子



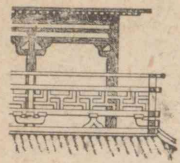
「私一己の經驗としては、あの中門の内側へ歩み入つて、金堂と塔と歩廊とを一目に眺めた瞬間に、さああつ。」といふやうな、非常に透明な一種の音響を感じました。二度目からは、最初ほど強くは感じませんでした。が、しかし、やはり同じ感じが全身を走りまわりました。痺しびれに似た感じでした。次の瞬間に、私の心は、魂の森の中にゐる。」といつたやうな、妙な静けさを感じました。最初の時には、私は何かの錯覺かと思ひました。さうしてあの古い建物の半ばは剥げてしまつた古い朱の色が、さういふ響になつて聞えるのかとも考へて見ました。しかしあとで熟考して見ると、その「さああつ。」といふ透明な音の記憶の中には、必ずあの建物の古びた朱の色と無数の櫺子れんじとの記憶が、非常に鮮明な姿で入りこんでゐるのです。金堂の周りにも、また歩廊全體にも、古びて黒ずんだ菱角の櫺子が、整然とした平行直線の姿で、無數に

並列してゐます。廻廊の櫺子窓からは、外の光や樹木の緑が透いて見えてゐます。この櫺子の並列した線と、全體の古びた朱の色とが、特にその「さああつ」といふ響に關係してゐるらしいのです。二度目に行つた時には、この神々しい直線の並列を眺めまはして、自分に強い感動を與へた美の真相を十分味はふことが出来ました。

しかし、その美しさは、櫺子だけが獨立してゐるわけではあ



法隆寺全景



まんじくづし  
卍字崩。卍字を  
變形したる紋様  
の一。

りません。實をいふと、櫺子はたゞ附屬物に過ぎないので。あの金堂の屋根の美しい勾配、上層と下層との巧妙な釣合、軒まはりの大膽な力の調和、五重塔の各層を勾配と釣合とで、たゞ一本の線にまとめ上げた微妙な諧調、そこらに、主として我々に迫る力があるに相違ないのでせう。ところが、その肅然とした全體の感じが、奇妙にあの櫺子窓によつて強調せられることになつてゐるのです。さうして、緑青と朱との古びた調和が、櫺子窓の剥けた灰色によつて特に活かされて來るやうに見えるのです。下略。

この日も右の手紙に書いたやうな感觸は勿論あつた。しかし、度重なるにつれて、印象が複雑になることは避け難い。漠然と感ぜられてゐたこの建築の特異な印象も、分化するにつれて、少しづつその特異な所以を呑みこませてくれる。まんじくづしの勾欄は、珍妙な印象の原因として、最初から氣づいてゐたが、その特



天平 聖武天皇の御宇。美術史で平城遷都(三七〇)より平安遷都(七九四)に互る時期。講堂 法隆寺講堂は正暦元年(空)京都普明寺より移建したもの。入母屋造 屋根の上方は切妻(キリツマ)にて、下方の寄棟(ヨセムネ)なるもの、法隆寺金堂の屋根はこの様式である。



寄棟造 入母屋造の上方切妻の道無くつづつ棟に一致せしめた形の屋根。(次圖参照)

に注意を惹く所以は建物全體の並はづれた高さにあつた。また屋根の勾配が天平建築に比べて、特に異國的ともいふほどの感觸を伴つてゐるのは、その曲線の曲度が大きく、また鋭いためであつた。講堂は藤原時代の作であるから、曲り方が遙に柔らかくなつてゐるが、それを金堂に比べると、尺度の上の相違は僅でありながら、感じは全然違つてゐる。實をいふと、法隆寺の建築に入母屋造の多いことも、前から知らないわけではなかつたが、今度初めて、ともに氣がついて、なるほどと思つた。寄棟造の單純明快なのに比べて、この金堂の屋根に、複雑異様な感じがあるのは、確に入母屋造の結果でもあつた。推古建築が特に支那建築らしい印象を與へるのは、このせゐであらう。もとより入母屋は後代に盛んに用ひられてゐるが、あの度の強い曲線に結びつくと、同じ入母屋も別種な感じを伴ふものである。



柱肉附 柱の中央部稍、ふくらみを持つてゐるのをいふ。

次に法隆寺の建築の柱が著しい柱肉附を持つてゐることは、希臘建築と似通つてゐる點で、我々の興味を刺戟する。支那人がかういふ柱のふくらみを案出し得たか否かは斷言の出来ることではないが、とにかく、この柱肉附が支那の漢時代の建築の感じを現してゐるのでないことは、確なやうに思ふ。佛教と共に希臘建築の様式が傳來したとすれば、それが最も容易な柱にのみ應用されたといふのも理解し易いことで、これを希臘美術東漸の一證と見なす人の意見には十分に同感することが出来る。もし支那に漢代から唐代へかけてのさまざまの建築が残つてゐるならば、佛教渡來によつて、如何にその様式が西方の精神の影響を受けたかは明白に示されてゐたであらう。現在に於ては、その證據となる建築は、たゞ日本に残存するのみである。その意味で法隆寺の建築は、極東建築史の得難い縮圖だともいへる。こんなことをあの柱の



埋煙

ふくらみによつて、つく／＼感じさせられたのも、今度が初めてであつた。確かにこの建築は、單に柱の肉附のみならず、その全體の構造や氣分に於て、西方の影響を物語つてゐる。

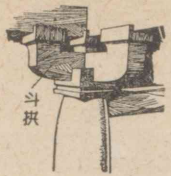
もう一つこの日の新發見は、五重塔の動的な美しきであつた。

天平時代の、大塔が悉く埋滅し去つた今日、高塔の美しいものを求めれば、この塔の右に出るものはない。塔の好きな私は、一種の抑へきれない慾望に驅られて、あの五重塔をあらゆる方角から味ははうとした。中門の壇上、金堂の壇上、講堂の前の石燈籠の傍ら、講堂の壇上、それからまた石燈籠の傍らに引返し、右へ廻つて、廻廊との間を中門の方へ出て、更に塔の軒下を頸が痛くなるほど仰向いたまゝ、ぐる／＼廻つて歩いた。この漫歩の間にこの塔がいかに美しく動くかを知つたのである。

塔は高い。随つて私の眼と五層の軒との距離は、五通りに違つ

## 斗拱

柱などの上に設けた方形又は矩形の木を組み合せたもの。くみもの。



斗拱

てゐる。各層の勾欄や斗拱まきぐみも各、五通りに違ふ。その軒や勾欄や斗拱がまた交互に距離を異にしてゐる。その他、塔の形を造り上げてゐる無数の細かい形象は、悉く同じ關係に立つてゐるのである。しかし私が靜止してゐる時は、これは必ずしも重大なことはなかつた。けれども、私が一步動くとき、是等の凡べての形象が、一齊に位置を換へて、私の眼との距離を更新する。しかもその更新の度が一つとして同一でない。眼との距離の近いものは、動きが多く、距離の遠い上層のものは極めて微にしか動かない。だから、私が連続して歩く時には、非常に早く動く軒と、緩慢に動く軒とがある。軒ばかりではなく、勾欄も斗拱も悉く速度が違ふ。塔全體としては非常に複雑な動き方をする。それでゐて、その複雑な動き方は決して亂雑な動き方ではない。統一ある複雑である。この複雑な塔の運動は、私が塔身と同じき距離を保つて塔の周圍を、

諧階



肘木



堂宇の建築で、上部の重量を受けるために柱に附ける横木。

歩く場合と、塔に近づいて行く場合と、また斜に少しづつ遠ざかり或は近づく場合とで、悉くその趣を異にする。私の歩き方は勿論不規則であつた。随つて塔の運動は變幻極りなかつた。しかもその變幻を貫いてゐる諧調は、——といふよりも絶えず變轉し流動する諧調は、崩れて行く危険の微塵もないものであつた。その運動にはもとより色彩がからみついてゐる。五層の屋根の瓦は蒼然として綠青に近く、その屋根の上下兩端には點々として濃い綠青がある。——即ち一列に軒端に並ぶ極の先と、勾欄の處々についてゐる古い金具とである。屋根と屋根との間には、勾欄の灰色や、壁の白色や、柱斗拱の類の丹色や、雲形肘木の黄色やなどが挟まつてゐる。その中でも、特に丹色は、突き出た軒の蔭になるほど濃く、軒から離れるほど薄くなる。即ち斗拱の組み方が複雑になつてゐるところは、丹色が濃く残り、柱の下部に至るほど薄

裳階



普通の屋根の下に、小さい屋根を附けて、廂の用をなし、兼ねて、建物を保護するもの。法隆寺の金堂・五重塔に附けた裳階は和銅年間(天武)のものといふ。

く鈍く剥げて行くのである。さうして、これらの色彩の最下層には、裳階の板屋根の灰色と、その下に微妙な濃淡を示す櫺子の薄褐灰色と、それを極度の明快によつて仕切る白壁の色とがある。——これらの凡べての色彩が、各速度を異にして、入り亂れ、走せちがひ、流動するが如くに動くのである。殊に私が驚いたのは、屋根を仰ぎながら軒下を歩いた時であつた。各層の速度が實に著しく違ふ。恰も塔が舞蹈しつゝ廻轉するやうに見える。その時、思はず私は呟いた。「このやうな動的な美しさは、軒の出の少い西洋建築には、見られないであらう。」と。私は、時の移り行くのも忘れて、いつまでも塔のあたりを徘徊してゐた。

(「古寺巡禮」に據る)

九塔影

河井醉茗

河井醉茗  
名は又平。詩人。  
堺市の人。明治  
七年生。

墨繩たゞす番匠が  
掌の上に造られて。  
朝、狭霧の晴れゆけば、  
寶珠を天に捧げ持ち、  
岸に聳ゆる五層塔。  
藏めし經も蠹みて、  
供養忘れし末の世の  
雲を遮る勾欄に、  
清き匏の痕見れば、  
塵に氣韻も残るかな。

秋は露盤に露うけて、  
扉は神祕に閉されぬ。  
四天の神に守られて、  
金輪際に根を埋め、  
夜は北斗をうかゞへり。  
家に住まざる山鳩の  
巢くふに處得たればか、  
虚空杳に翔れども、  
畫棟の朱の古びたる  
浮圖を慕うて歸るらむ。  
落暉は西に傾いて  
五重の屋根の歴々と

九輪

重なりうつる草の上、  
 月は廂に浮び出でて、  
 九輪の影は水に在り。  
 雲の崖より吹き落ちて、  
 風、湖を拭ひ去る、  
 波の面に刻まれし  
 藝術の花に咲き散らふ  
 時の力の遠きかな。  
 その世に媚びし歌反古は、  
 曆の嵐に破れたり。  
 生命の岸を下に見て、  
 天に呼吸する塔の  
 高き姿を水に見よ。

(塔影)

松本亦太郎

文學博士。帝國學士。心理  
 院會員。日本女子大學教授。慶應  
 馬縣の人。慶應元年(五三)生。  
 アクロポリス  
 希臘アテネに在る。  
 フロレンス  
 伊太利ローマ市の北西二五  
 軒アルノ河に跨る美術の都。  
 ヴェニス  
 伊太利の都會。水の都と稱せら  
 れる。建築は水路に面し、小汽  
 艇・ゴンドラが頻繁に往來して  
 る。

一〇 建築の美

松本亦太郎

日本でも西洋でも、昔からある大なる建築は宗教的建造物である。アクロポリスの神殿、或は羅馬フロレンス・ヴェニス等の寺院を西洋建築の代表とし、法隆寺や東大寺、或は比叡山あたりの寺院などを日本建築の代表者として、兩々相對峙せしめると、一見明らかなる相違が其の間に認められる。

西洋の神殿寺院は、自然界と殆ど無關係に獨立して築造されて居る。羅馬フロレンス・ヴェニス等にある寺院建築は實に偉大華麗であるが、多くは人家稠密、車馬喧轟の巷區に建立されて、天然の背景が無く、其の點は寧ろ殺風景で、樹林水石、幽邃の風趣を添へるものが無い。然るに、日本の神社佛閣に於ては、建築と天然の風色とが頗るよく調和し、それ等の建築は自然界の懷の中に抱かれて

## 一 幀

生長して居る趣がある。殊に日本の寺院は大抵天然景勝の地に據り、或は寺院堂塔を天然風物の一部とし、或は天然の風色を建築中の一部たらしめて、其のままの景色が既に一幀の樓閣山水畫の趣致を呈して居る。

日本の建築が主に木材を用ひ、或は青銅の瓦や板を以て屋根を葺くといふことが、一は建築と自然界とを調和せしめる上に深い意味を有して居る。石造建築は主に直線より成り、且餘り堅實であるから、日本の丘陵山峯の如く、婉曲の形狀を有して居る溫和な風景とは調子が合はない。然るに、木材建築及び青銅瓦の屋根は婉曲の線を以て組立てることを得、且輕快なる心持がある故に、周圍の樹木や丘陵山峯と其の形狀も色彩も頗るよく一致する。而して此の建築が星霜を重ね、神さびにさびて來ると、恰も天然生え抜きの建物の如くに見え、天人一致の趣が眞によく實現されるのである。

シェリング  
獨逸の哲學者  
(西紀一七五—一八五  
四)。  
幽玄

である。

哲人シェリングは、美術は意識無意識の一致である。世界の幽玄なる秘密が此の美術に發顯して居る。」といつて居る。蓋し此の無意識といふのは天然をいひ、意識といふのは人間の心をいふのであらう。自然界と人間の心、即ち天爲人工の調和する所に天地の秘密は現れて居て、それに因つて我々は世界の真相を窺ふ事が出來るといふのであらうが、こんな考へは却つて日本の美術に於て一層よく體得されるのである。日本人は美なる風景中に神明佛陀の鎮座するを希うて止まないが、西洋人は周圍に一本の樹木も無く、一莖の草花さへ無い石造の殿堂中に神を閉ぢ籠めようとして居る。アクロポリスの如き、岩石の丘陵上に神殿は立てられてはあがるが、其の丘陵は全く礎石として用ひられ、階段として用ひられ、或は劇場の如き建築物の一設備として用ひられて居るに

過ぎない。東大寺二月堂の廻廊より、南都遠近の寺院堂塔を山脚



(圖像想) 殿神スリポロクア

山腹樹木煙霞の間に一望する如き幽邃なる趣致は、西洋の寺院建築にはこれを認めることが出来ない。雅典<sup>アテネ</sup>隆興の頃には、アクロポリスの正面の石門下の段階を登り、一路神殿に通ずる處に、左右に歴史上の偉人の大理石像を並列してあつた。日本人は山門内外の直道を樹木鬱蒼たる並木とし、これによつて神殿佛堂に近づくに先立つて人の心を森嚴ならしめる。彼は人の心を偉人化せしめんとし、我は人の心を天然化せしめんとする。一言に

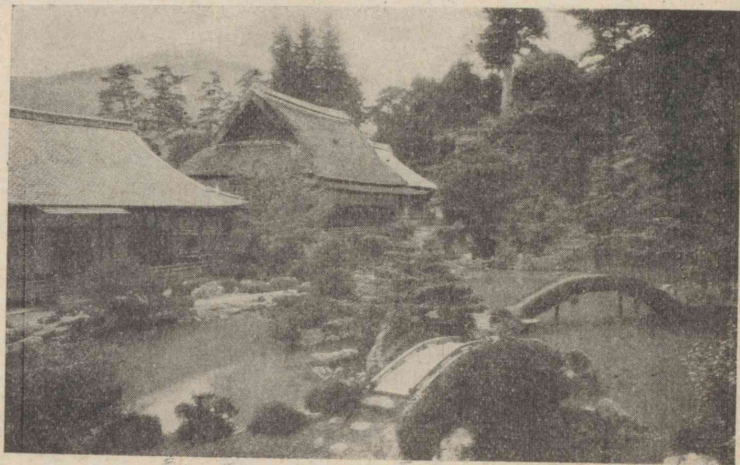
渾化

之をいへば、日本人は宗教的建築に於て自然の風光に對する愛好を離るゝことが出来ない。否、自然の風色が現さんとして現し得ざる所を建築が補つて現して居るが如き趣がある。西洋の宗教建築に於ては、自然は無視されて、人間の力や考への表現が主となり、人爲が天工を壓倒して居るが如き趣がある。西洋の美術的建築の様式が障壁式になり、外界を拒絶するに對し、日本のは柱楹式になつて、内外相通ずるが如きも、一は用ふる材料の相違にも由るのでもあらうが、一は又彼我趣味の同じからざるにも由ると解釋することが出来る。

なほ日本の寺院建築の特色として附言すべきものがある。日本の寺院は寺院建築と住宅建築とを巧に調和し、これを渾化するに林泉の美を以てして居る點に於て、西洋の寺院の夢想し得ない處を成就して居る。寺院は諸佛諸菩薩の住つて居る處であると

三寶院  
京都市伏見區に  
在る寺。  
南禪寺  
同市左京區に在  
る寺。

魚山三千院  
京都府愛宕郡大  
原村に在る寺。  
惠心僧都  
源信のこと。平  
安朝末期の高  
僧。寛仁元年(一  
〇七〇)寂。年七十  
六。



三寶院殿舎及び庭園圖

共に、これを又人間の安住する處とし、斯くの如くして佛も凡夫も一の家族となつて樂しむ極樂淨土の形相を寺院の境内に髣髴せしめて居る。例へば醍醐の三寶院や、京都の南禪寺の如き堂内にて、一日なり半日なりを過せば、人間を超脱して居る一種の和やかな、樂しい、然も寂しからざる自然の世界に入つた心持がする。大原の魚山三千院に往生極樂堂と稱するものがある。惠心僧都の妹なる人がこゝに住んで居つた

無量壽院  
道長の創建した  
法成寺の阿彌陀  
堂のこと。

と傳へて居る。堂の中央に大なる阿彌陀如來を安置し、脇立として左右に觀音勢至が跪いて居る。誠に敬慕に堪へない引附けられるやうな相好をして居る佛像である。而して其の周圍は比叡山の麓であるから、閑寂幽邃の趣がある。余は人間の往生すべき場處として、これほどのよい場處は無からうと感じた。關白道長は晩年無量壽院に籠つて念佛の聲を斷たず、臨終の時は彌陀の御手に通してある村濃の絲を引いて往生の本願を遂げたといふが、寺院住宅の一致といふ點から見、甚だ興深い話である。

(渡り鳥日記)

次の文より動詞・助動詞を選び、かつ其の接續を説明せよ。

- イ、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける(二五頁)
- ロ、晝棟の朱の古びたる、浮圖を慕うて歸るらむ(四五頁)
- ハ、年比思ひつる事は果しはべりぬ(五四頁)



平  
一九五  
二二 つけく草抄

吉田兼好  
姓は卜部。文學者。歌人。正平五年(1130)寂年六十八。  
仁和寺  
京都市右京區に在る。宇多法皇の創建。俗に御室といふ。  
石清水  
京都府綴喜郡八幡町に在る石清水八幡宮のこと。  
極樂寺・高良  
共に石清水の麓に在る末寺。末社。  
ゆかし

二 つけく草抄

吉田兼好

一 石清水

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心憂くおぼえて、或時思ひたちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへの人に逢ひて、年比思ひつることはたしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に山へ登りしは、何事かありけむ、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。とぞ、いひける。少しのことにも先達はあらまほしきことなり。

二 かなへ

これも仁和寺の法師、童の法師にならむとする名残とて、おのこの遊ぶことありけるに、酔ひて興に入る餘り、かたへなる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔を差入れて舞ひ出でたるに、満座興に入ること限りなし。しばし奏でて後ぬかむとするに、おほかたぬかれず、酒宴ことさめて、いかゞはせむと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて息もつまりければ、うち割らむとすれど、たやすく割れず、響きて堪へ難かりければ、かなはず、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうち掛けて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きける。



ぎつか鼎



ち掛けて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きける。

帷子  
醫師のがり

おほかた

二 つけく草抄

五五

途すがら

藁のしべ

栗栖野  
山城國(京都府)  
伏見區醍醐の  
邊

二 につれぐ草抄

に、途すがら人の怪しみ見ること限りなし。醫師の許にさし入りて、むかひのたりけむ有様、さこそ異様なりけむ。ものをいふにも、くさもり聲に響きて聞えず。かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなしといへば、また仁和寺に歸りて親しきもの、老いたる母など枕上に寄りゐて泣き悲しめども、聞くらむとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやうは、たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらむ。力をたてて引き給へ。とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳鼻かけうげながらぬけにけり。からき命まうけて、久しく病みるたりけり。

三 此の木なからましかば

神無月の頃、栗栖野と云ふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍

あゝ、伊予の心をわけて佛家上供  
 ちしほの、小らとがらひんそ  
 ひ、  
 こゝろて、  
 かなひのなり、  
 ちぢりきく、  
 あゝ、  
 損阿母の

集家筆自好衆

まゝ

五六

けろか越い二片のうづはにけつた細道きふかふみ分けていかにも細いやうに透けしる合すん下あ  
 庵か雨りうしち木の葉子はうもれた竹の中百水の音あふれ外しつくよりけ外は合もな  
 やつ来る人ばありません

五七

あはれ

事さむ

なからましかば

あなる  
連歌

行願寺  
京都の一條油小路に在った寺。

りしに、遙なる苔の細道を踏み別けて、心細く住みなしたる庵あり。  
 木の葉に埋もるゝ笈の雫ならではつゆおとなふ物なし。 閼伽棚  
 に菊紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人の有ればなるべし。  
 斯くても在られけるよと、あはれに見るほどに、彼方の庭に大きな  
 る柑子の木の枝もたわゝになりたるが、廻りを厳しく圍ひたりし  
 こそ、少し事さめて、此の木なからましかばと覺えしかる。

四猫 また

奥山に猫またと云ふものありて人を食ふなる。と人のいひける  
 に、山ならねども、これらにも猫の經あがりて、猫またになりて人と  
 る事はあなる物を。といふものありけるを、なに阿彌陀佛とかや  
 連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが、聞きて、獨りあり  
 かむ身は心すべき事にこそと思ひける頃しも、ある所にて夜ふく

るまで連歌して、たゞひとり歸りけるに、小川のはたにて、音に聞きし猫またあやまたず、足の下へふとより来て、やがてかきつくまゝに、頸のほどを食はむとす。肝心も失せてふせがむとするに、力もなく、足もたゞず。小川へころび入りて、たすけよや猫また、此やよや。」とさけば、家々より松どもともして、走り寄りて見れば、此のわたりに見しれる僧なり。「こはいかに。」とて、川の中よりいだきおこしたれば、連歌のかけもの取りて、扇小箱などふところを持ちたるも水に入りぬ。稀有にして助かりたるさまにて、はふく、家に入りにつけり。飼ひける犬の、暗けれど主を知りて飛びつきたりけるとぞ。

五 高名の木のぼり

高名の木のぼりといひし男、人をおきててたかき木にのぼせて

梢をきらせしに、いとあやふく見えし程はいふこともなく、おるる時に、軒たけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ。」と詞をかけ侍りしを、「かばかりになりては飛びおるともおりなむ。いかにかくいふぞ。」と申し侍りしかば、「其の事に候。目くるめき枝あやふきほどはおのれがおそれ侍れば申さず。あやまちはやすき所になりて必ず仕うまつる事に候。」といふ。あやしき下藤なれども聖人のいましめになへり。鞆もかたき所を蹴出して後、やすく思へば、かならず落つと侍るやらむ。

次の文より動詞・助動詞・助詞を選びかつその接續を説明せよ

- イ、息もつまりければうち割らむとすれどたやすく割れず(五五頁)
- ロ、かばかりになりては飛びおるともおりなむ(五九頁)

大西 祝  
文學博士。哲學  
者。岡山市の人。

明治三十三年  
歿、年三十七。

エピグラム  
警句。

一二 俚 諺 論

大 西 祝

ローマの一詩人がエピグラムを蜜蜂に譬へて、はり「螫あり、蜜あり、體は小さし。」と言へるは、すべての俚諺にとはいひがたきも、その最も巧妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乗なるものは、多くは此の三者を具ふ。言短くして意義味はふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

俚諺は人口に膾炙し易からんことを求むる故に、自ら律語を爲す傾向あり。我が國語にては、五七又は七五が自らなる律呂なれば、我が國の俚諺には、この律に従へるもの甚だ多し。「雉子も鳴かずばうたれまい。」「心の鬼が身を責める。」といふ如く、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をなせるはいと多し。「一人と屏風はすぐには立たぬ。」「思ふ念力岩をも徹す。」「身を捨ててこそ

浮ぶ瀬もあれ。」などは、七七の調子をなして語呂頗るよし。「十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。」といふも、その語に律あり。右と同じ理由により、同語又は同音を重ねたる類のものも多し。例へば「多勢に無勢。」「短氣は損氣。」「弱り目に祟り目。」「處かれば品かはる。」「藥九層倍。」「勝つて兜の緒をしめよ。」といふが如し。

かく律を成し、尾韻又は頭音を合はすこと、詩の句法に似たる所あるのみならず、俚諺に抽象の語少く、多くは具體的に言ひなして、感動の強からん事を求め、又これが爲に屢、誇張の言を喜ぶなども、それが詩歌に似たる點なり。この故に、諺には物の度量をいふにも、その數又は量を定めていふを好む。「七たび搜して人を疑へ。」「人の噂も七十五日。」「預り物は半分の主。」などの類は數ふるに違あらず。數の中にて、最も好んで用ひらるゝは三の數なるべし。

「三度目が定の目」「三年たてば三つになる」「懺悔話をすれば、三年の罪が減びる」「三人よれば文珠の智慧」「三人よれば人中」「二度あることは三度ある」「朝起は三文の徳」「石の上にも三年居ればあたくまる」「その他なほ多かるべし。又用心は臆病にせよ」「黒犬にくはれて、灰の和滓たれかすにおそれる」などは、誇張によりてその意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見まことしやかならぬ語句、即ちパラドックスを用ふるを喜ぶ。この種の諺に深く味はふべきもの少からず。「急がばまはれ」「言はぬは言ふに勝る」「逢ふは別れのはじめ」「兄弟は他人の始まり」「論語讀の論語知らず」「人を使ふは使はれる」など、その例なるべし。かく相反するが如き事柄の中にかへつて相通ずる所あるを發見するは、深邃なる智慧の一特徴なり。

パラドックス  
逆説。

パラドックスといふにはあらずとも、總じて反對のものを並ぶるは、吾人の注意を捕ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥儲」「聞いて極樂、見て地獄」「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥」「長者の萬燈より貧者の一燈」などその例なり。

反對を並ぶるのみならず、總じて二種の事柄を並べてそれを比照するは、俚諺の一大特長なり。これ俚諺の比喻に富める所以にして、その比喻の極めて妙なる、詩人の作としても恥かしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは多く此の類に屬す。「旅は道づれ、世はなさけ」といふが如きは、幾たび唱するも其の趣味の津々たるを覺ゆ。「花は櫻木、人は武士」是れ我が國民の以てそが理想を誇るに足るものの一なるべし。「佛法と藁屋の雨は出でて聞け」風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえ言ひ出でん。これを口ずさみ見よ、如何に詩心道心宗教心の相結びてなせる高雅幽玄

なる妙趣の浮び来るぞ。

かく二つの事を列べて相比照することなく、所謂暗喩を用ひたるもの頗る多し。「蟹は甲に似せて穴をほる。」「目くそ鼻くそを嗤ふ。」といふ如きは此の例なり。又巧に隱喩を用ひたるもの多し。例へば「商賣は牛のよだれ。」「得手に帆をあげる。」といふが如し。斯く比喩の用法は種々あれども、寓言に於けるそれとは同じからず。寓言は敘事の體裁を具へ、俚諺は然らず同じく意を寓して比喩を用ひるも、寓言はこれを出來事又は動作として語り、俚諺はこれを時間に結ばずして常恆の事實として語る。

以上は俚諺が其の表現の仕方に於て詩句に似たる所あるを言へるなれど、唯其の形に於て然るのみならず其の想に於ても詩趣を具ふるものの趣からぬは、上掲の諸例に於ても既に認知し得し所ならん。

一國民の言ひなれたる俚諺の内容を深く研究すれば、其の國民の歴史・氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會制度等、其の一切の生活と其の生活の理想とに就いて發見する所多々あるべし。此の點に於て、諸國民の俚諺を比較するはいと興味あることなり。我が國の俚諺中、今卽座に想ひ出づるもの三四を掲げんに、上に引ける「花は櫻木、人は武士。」といふ美しき諺は言ふも更なり、武士は食はねど高楊枝。「武士は相見互。」といふが如きは、我が國の歴史に大光彩を放てる武士といふ階級の理想を窺ふに足るべく、又之によりて、かかる理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ。」といふを見れば、千萬言の歴史的敘述に劣らず、我が國の歴史の或時代に於ける地頭といふ者の勢力の如何なりしかを察知し得べく、女に家なし。「貞女は兩夫に見えず。」などは、我が國に固有の諺とはいふべからざれども、亦以て婦女子に關す

る我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、嫁が姑になる。「老いては子に従へ。」といへば、我が國の家族制度を示す所あり。又「さはらぬ神に崇なし。」「棄てる神あれば助ける神あり。」「神は正直の頭にやどる。」「苦しい時の神のみ。」などは、宗教思想を示すべく、袖ふり合ふも他生の縁。」といへば、以て佛教によりて養はれたる因果思想を見るに足るべし。これらは唯念頭に浮びたるまゝ、數種の例を掲げたるに過ぎず。

歐洲諸國の諺には夫婦の關係を言へるもの甚だ多く、我が國にては寧ろ親子の關係を言へるもの多きが如し。「親の心、子知らず。」子を知るもの親に如くはなし。「子ゆるゑの闇に迷ふ。」「孝行をした時に親はなし。」「かはいゝ子には旅をさせよ。」「子は三界の首枷。」「子が思ふよりは、親は百倍に思ふ。」といふなど、親の慈愛をいふや至れり、盡せり。その上に「子よりも孫はかはいゝ。」といへる、何の

子ゆるゑの闇に云  
云  
「人の親の心は  
闇にあらねども  
子を思ふ道にま  
どひぬるかな。」  
(後撰集)

言かこれにまさりて孫の愛の濃やかなることを言ひ表し得るものぞ。かく親の慈愛を稱ふるといふものから、俚諺はまた能く人情の他面をいふ。「子を棄つる藪はあれど身を棄つる藪なし。」とは、よくも吾人の主我心を言ひ穿てるものかな。

一般の人情に自利の念はど強きはなかるべし。俚諺の如何に多くが損得の念を主とせるものなるかを見よ。而して其の中に如何によく普通の人情を穿てるものあるかを見よ。「下さるものは夏も御小袖」「かたきの家にて口をぬらせ」「ころんでも唯は起きぬ」「泣く子も目を見る」「まことに然り、泣く子すら自身を護るには油断せざるなり。「油断大敵」「小を棄てて大に就け」「長いものには巻かれよ」「曲らねば世に立たれず」など、何れか利益の念を主とせざる。聖人は「知らざるを知らずとせよ。」といひ、俚諺は「知つて知らざれ。」といふ。「鷹は死しても穂をつまず。」など氣



概を稱揚するもあれど、俚諺の大體の教訓は、賢かれ、損をすな。」といふにあり。故に「立つて居るものは親でも使へ。」と云ふ。

俚諺は事の一面を見てこれを誇張して言ふ傾あるものから、其の他面をいふに躊躇せざるが故に、一見其の判断の相反するが如く思はるゝものあれど、かく両面よりいふところよく世態、人情の實相にかなひて、其の判断概ね公平なり。「すきこそ物の上手なれ。」といへど、「下手の横ずき。」といふを忘れず、親に似ぬ子は鬼子。」といへば、形は生めど心は生まぬ。」といふ。かく事の両面を叩いて世相の内秘、人情の裏面を穿たんと力むる、是即ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言よく人情の裏面を評きて、巧に罵倒し了するものあり。

(大西博士全集)

金子元臣

宮内省御歌所寄人、國學院大學教授、東京市の  
人、明治元年生。

一三 川 柳 點

金子元臣

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷たれ、近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして、直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで左に其の二三を擧げて、いひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に來て、御慶帳の記名に困り、「さらば來ぬ分にして下され。」といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を玄關に出す。これも、あがるなといはぬばかりなり。

竹の子は盗まれてから番がつき

御慶帳

蘇東坡 本名は蘇軾。東坡は號。字は子瞻。宋の文學者。宋の建中靖國元年(西紀二二〇)歿。年六十。

餓蛟云々

宋の周紫芝の著。竹坡老人詩話に出てる。

「潛鱗有飢蛟、掉尾取渴虎」の十字を坡が約めて、「餓蛟取渴虎」としたのを簡の極とほめてゐる。

道灌

本名は太田持資、號は道灌。足利時代の武將。文明十八年(西紀一四八六)歿。年十五。

「いそがずば云々、いそがずばぬれざらましを旅人の後よりはる、野路の村雨。」

塙檢校 名は保己一。國

よくあることなり。後の祭にもあれ何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓誡ともなる。

おさへれば薄はなせばきりくす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟渴虎ヲ取ル。」と書きしを、いみじき手がらの様に驚ける人、もしこの句を見れば何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり

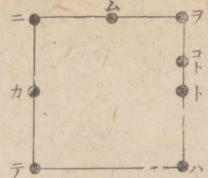
道灌の「いそがずば濡れざらましを。」の歌と一對の巧語。急ぎてもわるし、急がでもわるし。とにかく考へ物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかききなり。塙檢校が「さてく目あきは不自由な。」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

學者。文政四年(西紀一八二二)歿。年七十六。



漢文は捨假名、反點の左右にうるさく付き纏へるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには、「四角な文字に灸をすゑ。」といはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかきさよ。

近來は、中等教育を終へたる者の文章にも、この類の誤多し。あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくる、旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣くくもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。しかし事實なるをいかにせん。かの赤穂の城渡しにお金配分を唱へし小野九

小野九大夫 戯曲假名手本忠臣藏中の人物。

尋常茶飯

太夫はこの露骨なるものか。  
かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事、傳説、史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

戸隱も神樂のあひだ髭をぬき

戸隱明神  
長野縣戸隱山。  
手力雄神を祀る。

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隱明神なるを思ふべし。  
鑷けみきに髭ぬく、ひま人の所作を、神代に附會したる働きあり。

能因

一〇頁頭註参照。

御紀行拜見に能因は當惑し

なましひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。天日に焦がして、顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届かずやありけん、物にその沙汰なし。作者のつけ目はこゝなり。但し袋草紙に、「一度においては實か。八十島の記を書けり。」とあり。何時も室内旅行家にはあらざりけらし。

袋草紙  
四卷。藤原清輔の著。歌學の書。

忠盛

平清盛の父。仁平三年（六一三）歿。年五十八。

忠盛の高名の場を犬が嘗め

抱きとめしは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛び越して、高名の場を嘗めたりといへる、滑稽突梯容易に及び易からず。

隼太

源頼政の郎等猪隼太。

その暗さ隼太櫻に衝きあたり

盛衰記、頼政鶴を射る條に、「黒雲とは見たれども、天は實に暗し。いづこを射るべしと、矢所さだかならず。」とあり。乃ち、郎等隼太が、左近の櫻に鼻衝きあてて、まごく、する一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきん者ぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ

時致  
曾我五郎の公子。幼名は箱王丸。建久四年（一一九三）歿。年二十。  
祐成  
曾我十郎の公子。幼名は二萬。時致の兄。建久四年（一一九三）歿。年二十二。

兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に駆けつくるは、曾我の物語中出色の快譚なり。これを圖にして、大根の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、そ

佐野

謠曲鉢の木に出てる佐野源左衛門常世。戸塚の阪。神奈川縣鎌倉郡に在る。

道風

姓は小野。日本三蹟の一人。醍醐・朱雀・村上の三天皇に仕へた。康保三年(西天)歿、年七十一。

文王

周の武王の父。

太公望

呂尚といふ。支那周の文王・武王の功臣。

の大根を嚙らせたるはこの作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび

戸塚の阪は鎌倉入りの一難處。元來乗力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さるを、二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然に仕立てたるところに一種の面白味あるなり。

釣れますかなど文王そばに寄り

流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには平凡ならざるを得ず。たゞ、などの語、胸に一物ある趣を狀し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

一四 狂 歌

鯛屋貞柳

鯛屋貞柳 本名は榎並善八。號は油煙齋。大阪の人。享保二十年(西天)歿、年八十。

ふじの山夢に見るこそ果報なれ路銀もいらずくたびれもせず

朱樂菅江

朱樂菅江 本名は山崎景貫。江戸幕臣。南畝寛政十二年(西天)歿、年六十三。

天の原月すむ秋をま二つにふりわけ見ればちやうど仲麿

四方赤良

四方赤良 本名は太田翠。江戸幕臣。南畝または蜀山人と號した。文政六年(西天)歿、年七十五。

ほとゝぎすなきつるあとにあきれたる後徳大寺の有明のかほ

宿屋飯盛

本名は石川雅望。江戸の人。天保元年(西九)歿、年七十八。

宿屋飯盛

歌詠は下手こそよけれ天地の動き出してはたまるものかは

大屋裏住

本名は久須美孫兵衛。江戸の人。文化七年(西七)歿、年七十七。

大屋裏住

うぐひすも蛙もおなじ歌なかま経よむもありたくなくもあり

つむり光

本名は岸宇右衛門。江戸の人。寛政八年(西六)歿

つむり光

ほとゝぎす自由自在にきく里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里

栗柯亭木端

本名は未詳。大阪の人。安永二年歿。

栗柯亭木端

世の中をなんのへちまと思へどもぶらりとしてはくらされもせず

一五 勅題

明治二十四年 社頭祈世

御製

とこしへに民やすかれと祈るなるわか代をまもれ伊勢のおほ神

皇后宮御歌

神かせの伊勢の内外のみやはしらゆるきなきよをなほ祈るかな

選歌

人ことにまゐる社はかはれとも御代を祈るはひとつなりけり

皇太后宮屬 松波資之

御製  
明治天皇御製

皇后宮御歌  
照憲皇太后御歌

鹿兒島縣 川 畑 梓  
民草のなひきそろひて大御代をいのるは神もうれし  
かるらむ

大正五年 寄國祝

御 製

大正天皇御製。

御 製  
としとしにわか日の本のさかゆくもいそしむ民のあ  
れはなりけり

皇后宮御歌

皇后宮御歌  
皇太后御歌。

神風の伊勢のはまをきまねかねとしたひよるらしよ  
ものくにくに

選 歌

富山縣高岡市横田町尋常小學校長

小林 守 直

みめくみのいたらぬくまもなかりけり國の廣さはま  
しに増せとも

東京府理學博士徳水重康妻

元

子

おほやしま國のはしめも遠けれとさかゆく末はかき  
りしられす

昭和三年 山色新

御 製

山やまの色はあらたにみゆれとも我まつりこといか  
にかあるらむ

皇后宮御歌

雲の上にそひゆる富士のあらたなる姿や御代のすか  
たなるらむ

皇太后宮御歌

大君の御代の始めのよろこひをあらたに見する山の  
色かな

選歌

京都府 半井君子

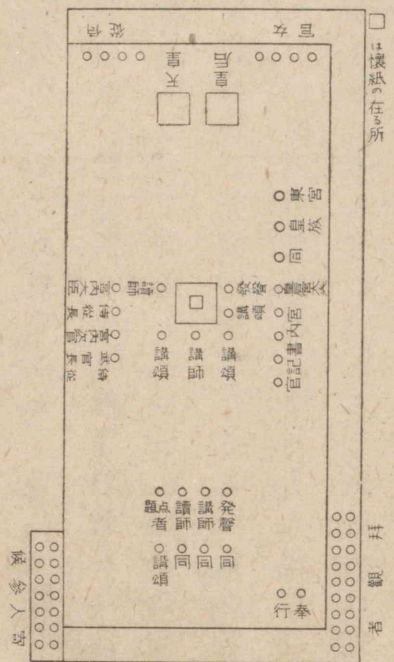
高御座のほりますへき年たちて山もみとりのいろあ  
らたなり

愛知縣 森 嘉 藏

空までもひろこる國のいきほひを年たつ山のいろに  
見るかな

詠進者のしをり

和歌はわが國固有の藝術であつて、また象徴であるといつても  
過言ではない。神代より歴代の帝、みな和歌を詠ませられて、大御  
心をお示しになつて



新年歌御會座席圖

在せられる。允文・允武  
武なる 明治天皇に  
は斯道に御心を寄せ  
させたまひ明治二年  
より古來の儀式によ  
つて歌御會を始めさ

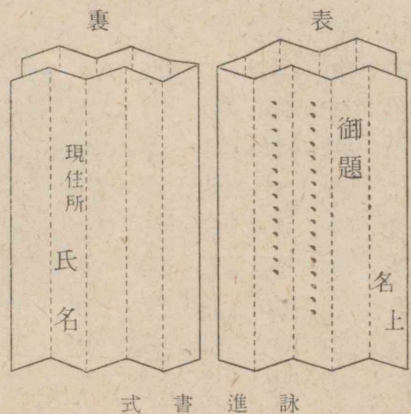
せたまうたのである。最初は、皇族華族勅任官等から詠進せしめ  
られたが、同五年から、判任官に至るまで歌道に志ある向きは詠進  
可致と仰せられた。更に同七年より一般臣民に詠進を許され、詠

允文・允武

點者 歌會で諸人の詠んだ和歌の優劣を判じ、批點を加へるもの。  
懷紙 和歌を正式に詠進するとき用ひる紙。多くは檀紙・杉原紙等。

歌を各府縣別に製本して、歌御會始當日叡覽遊ばされた。また同十二年よりは臣民の詠進歌中から、點者の選抜した秀逸のもの五六首を、一座の懷紙くわいしに加へて御前に披講せしめられることとなつて今日にまで及んでゐる。また一般の詠進歌は府縣別に製本して乙夜の覽に供し奉り、叡覽お濟みの後は、皇后陛下の御手許にお廻しになつて御覽あらせられるのである。たとへ選歌に漏れて御前披講の光榮に浴さなくとも詠進者の名譽は平等であつて、われわれ臣民の聲が畏れ多くも天聽に達するのであるから、其の光榮は身に餘るものである。詠進者は宜しくその書式を守つて、鄭重に詠進しなくてはならない。

用紙は、美濃紙を用ひて、まづ二つ折にし更に五つに折る。従つて紙には折山が表裏で八本つく、表の第一折には詠進者の名を書き、上の字は名の右脇によせて、たとへば太郎上はな上と書くので



詠進書式

ある 第二折の御題のところには其の年の勅題を書き、第三折に上の句を第四折に下の句を書くのである。裏には第四折に現住所氏名を記す。官位・勳功・爵のある人は氏名の上に書くのである。氏名はかならず實名を書き決して雅號等は使つてはならない。また氏名の下に捺印することも宜しくない。また封筒の表書は、  
宮内省御歌所御中  
と書いて差出すこと。一人で一首以上は詠進することは出来ないのである。



五十嵐力

文學博士。早稲田大學教授。米澤市の人。明治七年生。

文武天皇  
第四十二代  
宣命

純粹の我が國語を用ひて天皇の大命を宣傳するため用ひられた公文書

古事記

三卷。和銅五年(三三三)太朝臣安鷹が撰した。

日本紀。三十卷。養老四年(二六〇)舍人親王が撰した。

萬葉集。二十卷。最古の和歌集。稱徳天皇の頃までに出來た。

一六 明と淨と直と

五十嵐力

文武天皇が御即位の際に下された宣命の中に、左の詞がある。

是を以て、百官人等、四方の食國を治めまつれと任せ給へる國の宰等に至るまでに、天皇が朝廷の敷かし給ひ、行ひ給へる國の法を、過ち犯すことなく、明き淨き直き誠の心もちていやす、みく、て緩怠ることなく、務め結りて仕へまつれと詔り給ふ大命を諸聞食へと詔る。

我等は此の宣命にある、「明き」「淨き」「直き」心といふのが、日本人の性質中の核となり、中心となるものであらうと思ふ。此の語は代々の詔勅に幾度もく、繰返されてゐる、しかも重きを置いて繰返されてゐる。其の他、古事記、日本紀、萬葉集等に於て重々しい場合に幾度も用ひられてゐる。これは畢竟、我等の祖先が心の中に深

く感じたこと、大和民族に最も濃く最も多量に賦與された性質が、自然に口を衝いて屢、發したのではないか。世に大和民族の特性と稱せらるゝ現實、光明活動向上、中庸快活、忠孝清廉、勇武、義侠、風雅等の諸性質は、概ね此の明、淨、直の三大性を基本として説明されるらしく、殊には三種の神器が此の三大性の標章として遺憾なきやうに思はれる。

鏡の性は明、其の徳は玲瓏透徹に物を映すにある。日本人は鏡



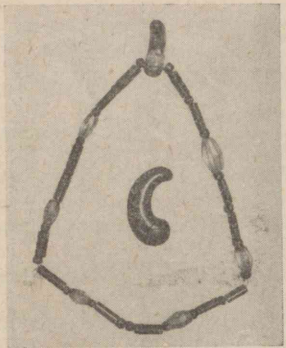
のやうな明き心を以て正しく事物を觀た。故に其の見方は概して公平無私で、赤い物は赤いとし、黒い物は黒いとし、善行に對しては我を忘れて歎美し、悪行を見ては敢然として排斥するといふ傾きがあつた。天

照大御神は、鏡を齋きて、我が大御前を見るが如くせよ。」と仰せら

れた。 全國無數の神社には、其の鏡が神體として齋かれてある。 詔勅や、祝詞や、君臣應對の詞等に、「明き心」といふ語が澤山に用ひられてゐる。 これ等はいづれも、此の性質が我が國民の心底に根深く植ゑつけられた證據になると思ふ。 我が國民の中庸性折衷性、調和性も一面此の根本性質の結果であらう。 我が國には政治社會、宗教等の諸方面に互つて、諸外國に見るが如き非常な大衝突がないではないが、割合に少く、又いつもよい加減に切り上げて調和するといふ傾きがある。 例へば、異主義が新たに外國から入つて来る。 毛色が變つてゐるので、暫くは争ふが、やがてお互に道理も無理もあることが解ると、馬鹿らしくして争論が續けられなくなる。 そこで騎虎の勢の意地喧嘩は止めにして、長短取捨の調停をする。 萬事此の通りである。 大和民族は、十字軍や佛蘭西革命の如き、極端な狂言を演ずるには餘りに心が明る過ぎる傾きがある。 我等

騎虎の勢

は日本人を、「公正」といひ、「理に鋭し」といひ、「感情の平靜を保つ」といひ、「日本人は何事をも受入るゝ胸懐洞然たる人種なり。」というた外人の評が、決してでたらめの空世辭ではないと思ふ。



清淨の徳は、玉に於て絶好の標章を得てゐる。 淨と明とは似てはゐるが、同じくない。 其の異ふ趣は、丁度鏡と玉との異ふ趣に似てゐる。 汚穢混濁玉を忌むことは、清明ともに同様であるが、清はそれ以上に味はひあり、温かみあることを要する。 譬へば、鏡は空白にして正しく物を映ずれば足るが、玉は必ずしも空白物を映すを要とせずして、温潤の光、圓融の相、澄徹の趣あることを要するが如きものである。 本來日本人は明らかに事物を見る長所があるのみならず、外物を見るにも、自己を發表するにも、一種の味はひある態度を具へてゐる。

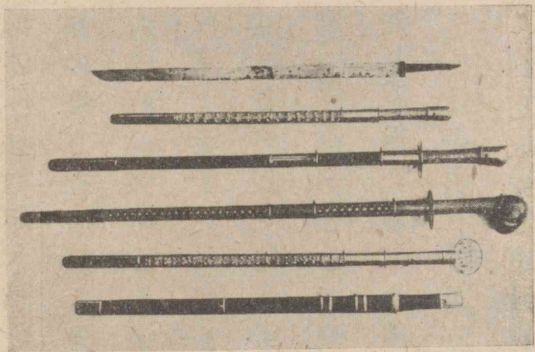
襖・祓

た。其の明は空白の明ではなくして、温潤・圓融・澄徹の趣味を加へた明である。硝子の明ではなくして、水晶・夜光珠の明である。我が國には古來襖・祓が多く行はれ、廣く用ひられ、且重要視されてゐた。祝詞・宣命を始めとして多くの歌詠・諷謠は、明き心を現しながら、趣味・風韻に富んでゐた。而も其の趣味や形容が、諸外國、例へば支那の文學に見る如き、張子の虎のやうな誇張の弊がなくて、よく其の實を現し、中味にふさはしい修飾を纏うてゐる。むくつけき武人にも、戦陣の間に花を翳し、歌詠を贈答し、或は胃に香を焚きしめるといふやうな嗜みがあつた。上流社會はいふに及ばず、市井の民に至るまで、それ／＼ふさはしい文學を有つてゐる。外國出稼ぎの労働者が、其の日の生活に窮しながらも、猶一二の植木鉢を持たぬはなく、而してこれは外國の労働者に絶えて見ぬ所といはれてゐる。大工・指物屋の手に成るはかなき家具や、細工物も、西洋

花を翳し  
一、谷の戦に於ける梶原景季の故事。  
 歌詠を贈答  
源義家と安倍貞任の故事。  
 胃に香を  
木村重成の故事。

のが表面のみ美しく、裏面の粗末なのに反し、我が國のは見えぬ裏面まで手を盡すといふ嗜みがあるといはれる。これ等は孰れも

大和民族が清きを愛する根本性の現れたものではないか。我等は、日本人は世界一の審美眼を有する國民にして、貴族より労働者に至るまで皆美術を愛翫す。』  
 劍というた一外人の批評が、必ずしも虚妄でないと思ふ。



直は正を意味し、勇を意味し、決斷を意味し、直前直往を意味する。其の厭ふ所は、躊躇・緩慢・首鼠兩端である。曲ること、拗くふさはしい。元來直の徳の本領は、心の明らかに見た所に向つ

首鼠兩端

父母を見れば云  
云  
萬葉集、山上憶  
良の歌の中の  
句。

海行かば云々  
「海行かば水漬く  
屍、山行かば草  
むす屍、大君の  
へにこそ死な  
め、かへりみは  
せじ。」  
(大伴家持、萬  
葉集)

て直前するにある。若し右の三徳を一括して、此を一體と見れば、  
明は其の靜的方面即ち知の方面で、直は動的方面即ち意の方面で  
ある。知の明らかに見たる所をば、意が直進して實現する、而して  
知の見方、意の働き方に潔くして言ひ知らぬ味はひのあるのが、邦  
人固有の性格ともいふべきであらう。明き心を以て、父母を見れ  
ば尊し、妻子見ればめぐしうつくし。故に其の明き心の示す所に  
従ひ、直前して父母に事へ妻子を愛しむ。君を仰げば、八隅知し大  
君。「現つ神。」として、國に臨み給ふさまが限りなく高く貴い、故に直  
前して、「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍。」の獻身的奉公を效  
す。此の通りである。而して其の君父に事へ、妻子を愛するや、多  
くは水臭い思慮、分別利害勘定の結果ではなくして、直實掬すべき  
趣があつた。此處が眞淵宣長等國學者が感歎し自負して措かな  
かつた所である。

(新國文學史)

藤岡作太郎

號は東岡。文學  
博士。國文學者。  
金澤市の人。明  
治四十三年歿。  
年四十一。

一七 國民の特性と自然

藤岡作太郎

國民の特性は、初よりその人種に固有なるものありと雖も、また  
その住處の地勢氣候によつて馴致せられて變化したるもの少か  
らず。そのもと同じき印度歐羅巴種族が、東洋に、西洋に相分れて、  
寛猛柔剛、匹を異にする種々の國民となりたるは、南國の日、北地の  
嵐、山海さまざまの風物が、これを養ひたるなり。日本國民が全一  
體としてよく統合せるも、また蒼々たる煙波の外、四圍接する國な  
き、その地位に影響せられしこと少からざるべし。さらば我が國  
民の特性を論ずるに當りては、日本の自然に就いても觀察を下さ  
ざるべからず。

日本は東洋の樂園と稱せらるゝこと、歐洲に於ける伊太利、瑞西  
の如し。氣候中和にして、山水明媚、瘴煙毒霧の襲ふことなく、猛獸

瘴煙毒霧

## 雄大魂偉

毒蛇も棲むこと稀に、曠茫たる平原、眼界の盡きざるものなく、浩蕩たる長流數百里の山野を浸すを見ず。雄大魂偉なる大陸的風致に乏しと雖も、至るところ優麗嫺雅なる勝景に接す。東海の岸を縫うて進めば、富士を前にし、富士を後にして、長汀曲浦、浪靜に砂滑かなり。瀬戸内海に船を行れば、松の嶋を迎へ、巖の嶼を送りて、朝日夕日に映るふ景趣は應接に遑あらず。陽春、櫻あり、晚秋、菊あり。初夏の梢にかゝれる藤波は、紫の綾を池水の鯉に織り出し、季冬の森、鶉の聲暗き蔭に、紅の椿は拾ふ兒なしに切りに落つ。美なるかな山河、これに接するものは怒れる心も和ぎ、結べる思ひも解けて、受賞に他事あるを得ず。山川は優美なり、穩和なり。これに馴れ、これを愛する國民が、また優美にして穩和なる特性を有するに至れるは、即ち自然の感化の致すところなるべし。日本の土地は孔雀を生ぜずして、雉子を産す。國民の性もまた、孔雀の姿の如く、濃

艶ならずして雉子の如く淡泊なり。悲憤の情、時には火の如く燃ゆることありと雖も、概するに稟質猛烈ならずして穩健に、執着せずして洒脫なるも、また外圍の風物が漸次に養ひ來れるものならんか。

## 饒—撓

慈愛深き母の懷に養はれたる子は、生涯その恩愛を忘れず。日本の風土は國民の慈母なり。地味豊饒にして、河海に魚貝の利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美溫和なる山川は常に臉上に愛を湛ふるが如し。接するものはこれに親しみ、親しむものはこれを慕ふ。愛に迎へらるゝものは愛を酬いざるを得ず。天然の大公園に住む我が國民が、その一本一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には、食品も玩具も數ふるに足らず、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅こそ、燈光に映えて、瑞々しく鮮やかなるを、中流以下の市民はあれこれと買ひ求め

葱草



て、座敷に飾り、庭に植ゑ込む。裏長屋の道具の据ゑ所もなき窓前には、稗蒔を作りて田舎の景色の面影を偲び、破鉢に唐の芋を育て、やさしき野趣を嬉しむ。長火鉢のわきの福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる葱草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて、自然を愛することかくの如きは、他の國民にその匹ありや。

我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず。自然の愛すべきを見て、恐るべきを思はず。野をも垣をも吹き亂す二百十日の風も、野分の名に優しく、峯をも谷をも一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり。荒き猪も臥猪の床と稱ふるにやさしく聞ゆなど兼好がいへるは、我等が自然に對する態度を説明せるなり。雨といへば照り續きたる夏などは嬉しけれど、一日の降りも十日の照りより飽きくするに、卵の花く

臥猪の床云々  
「恐しきものし、  
も臥猪の床とい  
へばやさしくな  
りぬ。」  
(徒然草)

源氏物語  
五十四帖。一條  
天皇の時(六四七  
一六七)紫式部  
の著した小説。

だし、時雨など何れも趣ありと感ぜらる。自然の愛はかくして現るゝのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふ。すでに文學には源氏物語の卷の名に、夕顔・末摘花・葵・神朝顔・胡蝶・螢・常夏・藤袴・若菜・柏木・鈴蟲・紅梅等の類多く、これより源氏名の稱は起れり。我等はまた日常の用品にも、自然より出でたる名を用ふ。菓子に鶯餅・櫻餅・柏餅・萩の餅・紅梅焼・時雨など枚擧するに暇あらず。今の煙草にも福壽草・白梅・皐月・あやめ・萩・紅葉等あり。古くは獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へいひしもやさしからずや。かくのごとき類例は指を屈するに従つて想ひ出づべく、いづれも國民が自然の昵愛を示すものにあらざるなし。

我が國民は自然を愛賞する餘り、又よくこれを尊重せり。尊重するものには悦んで服従す。彼等は漫に人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。この服従を以て屈伏といふ勿れ。悦服

は自動的なり、屈伏は被動的なり。屈伏するものは不平なる奴婢が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは從順なる兒孫が寛仁なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意となす。花を愛する趣味の我等がいかに西洋人に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら、幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するよりも、峯に互り、川に沿ひて雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もそのままに、願はくはこれに置く朝露をも落さざらむとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣も卓上にふり撒きて感興を助くるに、一は床土の盆石、盆栽に、自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同

ますほの色

じ菊を見るにも、彼は色を重んじ、此は形を主とす。西洋草花のチウリップ、ヒアシンスなど、その葉に何の趣もなくしてその花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼には毒々しと感ぜらる。秋の野の女郎花、尾花、その花に何の美はしきことかある。されど、あるかなきかの黄花を捧げて、なほたよくと下蔭の蟲の音にもゆらぐさま、ますほの色はやがて白くほゞけて霧に濡れ、風に靡く趣は、我等が胸に浸みて忘れられず。日本人が花を愛するは、その外形にあらず、色彩にあらずして、その風情にあり、たゞちに自然の懷にわけ入つて、その眞意義をにぎるにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きは、これ日本國民の特性なり。

(國文學史講話)

相馬御風  
名は昌治。詩人。  
評論家、作家。  
新潟縣の人。明  
治十六年生。

一八 冬から春へ

相馬 御風

久しぶりの雨晴！しかも何といふすばらしいうらゝかさだらう。朝早く床の中で目をさますと、すぐにもうそれが感じられたのだつた。晴の日は車井戸の音からしてちがふ。深く積つた雪の上ながら、晴の朝は雪の凍り方がひどいので、道行く人の雪下駄の音までが冴えてきこえる。幾日もくゝの雪降りつゞきのために聞くことのできなかつた下駄の音を、久しぶりで朝のめざめ際に聞くことができる。――それだけでも妙にうれしい心地になるものだ。

一面に降り積つた雪の上を照す朝の太陽のまぶしさ、軒のつらのさんらんたる輝き。貧しい自分の家ながら、時には水晶宮にもたとへたいほどの美しさにうたれることさへある。濃青こあをに晴

れわたつた空のあなたに、雪に蔽はれた高い山脈を仰ぎ見る厳かな心地も、何とも言つてみやうがない。屋根の雪の融けて滴る水の音を、家の内でしづかに聞いてゐるのどかさもすてがたい。

久しぶりで仰ぎ見る青空の廣さは、また格別である。空の青さの私たちの心身に與へる功德の偉大さを、しみぐゝと感ずることのできるのも冬なればこそである。来る日も来る日も、重苦しい灰色の雪空の下に身をちゞめて来た北國の住居が、かうしてまれに得た晴天の下に身も心も空の廣さに融け合ふやうな快さを感じて、人々互に心の底からの歡びの聲を發しあふ光景には、これまた他の地方では見ることできぬ興味がある。

漁村では久しぶりの風をよるこんで、朝まだ暗いうちから沖へ出る。漁師たちの話では、なんでも寒さのために手が凍えて感覺



を失ひかけると、思ふさまひどく手を舷にぶつつけては仕事をつづけるといふ事である。舟を乗出す前に、漁師たちは先づ砂濱に焚火をして暖をとる。その焚火は舟が沖へ出ても、まだ焚き捨てられたまゝに燃えてゐる。私はよく、冬の朝の磯邊にかうして焚き捨てられたまゝ燃えてゐる火を見て、妙な一種のさびしさにうたれた。

焚きすてて沖へいでゆきし漁夫も

はるかにや見む磯の焚火を

焚きすてられ風のまに／＼燃えあがり

かつ燃えほそる火を見ればさびし

朝づく日さし来るなべに磯濱の

焚火はなほも消ぬべく見えぬ

冬の海の色は、一つは陸の雪と対照されるからでもあらう、一層

なべに

その紺青が濃く深く見える。その紺青の海のはてに小さく見えてゐる能登の山も、佐渡の山も、同じく雪に蔽はれて銀色に光つてゐる。午後の日さしの暖かさを増す時刻になると、誘ひ合したやうに子どもが群が濱の砂地に集る。幾日も／＼雪の上ばかり歩いてゐた彼等は、久しぶりで地面を踏む歡びに、先づむちやくちやに砂地の上を駆けまはる。下駄や足袋などを履いてゐる子は一人もない。彼等は何よりも、先づ彼等の手や足の皮膚へちかに大地の觸感を味はひたいらしく見える。そんな風に、先づさん／＼はだして駆けまはつた後で、彼等は各自に砂の上に座を占め、肱から上まで袖をまくし上げて砂地に穴を掘りはじめ。そして、互にその穴の深さを競ひ合ふ。その眞剣な様子を見てゐるとたまになく快い。

子どもたちの掘る砂原の穴の深さが、彼等の手の及ばぬほどに

深くなる頃には、短い冬の日がそろ／＼夕ぐれ近くなつてゆく。そして、廣い砂濱のあちらこちらに、沖から歸る舟を待つ焚火が燃やされだす。それは多く漁師のかみさんたちが焚くのである。すると、今まで砂に穴を掘ることに夢中になつてゐた子どもたちは、そら來たとばかりにあちらこちらの焚火の周圍へと集つてゆく。そして我も／＼と藻くづを拾ひ集めては、今度は焚火の競争をはじめめる。

こんな風にして、しづかに久しぶりの雪晴の日も暮れてゆくのであるが、しかも、そのやうな好晴の日の三日とつゝかないのは、北國の冬の常である。「此の分では明日もよからう。」などと喜び合つて、戸口を閉すが早い、か、凄しい西北風に吹き上げられて眞黒な雪雲が、海から山へと渦巻き寄せるやうな事が幾度となく繰返される。そして四五箇月の永い間に、僅二十日ぐらゐしか晴れた日

を持ち得ないのが、北國の冬の毎年の例である。

これがまあつひの棲處<sup>すゐか</sup>か雪五尺

一茶ではないが、私たちもこれに類した嘆聲を禁じ得ないことがしば／＼である。しかも、毎年のさうしたわびしい永い冬の生活のうちにも、味はへば味はひ盡せない妙味がある。そして深く積つた雪の底にも、人知れず新しく芽ぐみつゝある草木の生命の不斷の活動があるやうに、北國の人々の永いわびしい冬ごもりの生活のうちにも、いつとなしに新しい春を迎へる新たな心が養はれつゝあるのである。

背戸畑の雪をぬけいでて枝かはす

柿の木も桐の木もみな裸なり

一茶  
姓は小林。徳川末期の俳人。長野縣柏原の人。長文政十年(四七七)歿、年六十五。

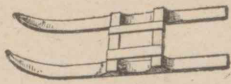
まつたく冬枯の木立の枝ぶりの風情は、雪の中で見れば一層おもしろいものである。雪もよひの空へと高く伸びて、風に吹きやすらわれてゐるけやきや、いてふの枝ぶりなどを見ると、一種莊嚴の感にさへ打たれる。まれに晴れた月夜に、高い木々の枝が雪の上におとしてゐる影のおもしろさもまた格別である。眞白な雪の小山をうしろにして、裸の木立の立ちならんでゐる景色も私は好きである。嚴冬なほ色變へぬ常緑樹にも雄々しさは感じられるが、それよりもむしろ、荒れ狂ふ吹雪のなかに裸のまゝ突つ立つてゐる落葉樹の姿に、一層雄々しい趣を見ることがしばしばである。

一面に眞白な雪の野原に、いろ／＼な人の足跡が重なり合つて出来た細い一條の道が、村から村へとつゞいてゐる。さうした雪の上の細い道筋をたどることは、或時にはたまたま寂しく、或時

わら沓



櫛



にはたまたまなく懐しい氣のするものである。まだよく固らない雪路を歩いてゆくと、そこにはさまざま／＼な足跡が見られる。ごむ靴の跡もある。わら沓の跡もある。櫛の跡もある。子供たちの小さな靴の跡もある。そして、さうしたさまざま／＼な足跡の一つ一つが、見分けられぬほどに重なり合ふときに、始めて固いしつかりした道が出来る。雪の上の道は、一人々々がつぎ／＼に踏み固め踏み固めた足跡の重なりだけで出来た道である。そしてそれは人間の棲處のあるところ、どこまでもどこまでも連つてゐる。けれども、さうした雪の上の道も、雪の消えるとともに消えてしまふ。そしてその下から、地面に作られた道路が現れる。そこにはもう人々の足跡は残らない。

雪が消えて先づ見ることで出来る緑の美しさは、何といつても

畑の麥が最もあざやかである。麥は雪の深い年ほど作がいといはれてゐる。雪に壓されるのが麥にはいとからだといふ。むら消えの雪掻き分けて路のたうを探して歩くのも、早春の樂しみの一つである。雪の消え間から路のたうの覗いてゐる風情は、何ともいひやうなく可愛らしい。あの路のたうの淺緑の色と、ほろ苦い舌ざはりとは、私の最も好きなものの一つである。かくて路のたうの風味がいち早く食膳に春をもたらすのである。

(野を歩む者)

次の文中の圈點を附したる部分の品詞名を問ふ

子どもたちはそら。來たとばかりにあち。ち。ち。の焚火の周圍へと集つてゆくぞ。して。今度は焚火の競争をはじめ

(102頁)

貝原益軒

名は篤信。儒者。筑前國(福岡縣)の人。正徳四年(一七二四)歿、年八十五。

一九 春 興

貝原 益軒

四時の行はれ云云  
「子曰、天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉。」  
(論語)

一年の内、天地の道常にめぐり、四時に行はれて萬古よりこのかた止まず。其の間霞たつより雪の積れるまで其のけしき、をりに異り。又朝夕のけしき日々異なる、變態きはまりなき眺めなり。天にありて象をなせるは、日月の輝き、風雨のうるほひ、霜雪の清らかなる、雲煙のたなびけるは、天の文なり。地にありて形をなせるは、山河のそばだち流れ、江海の深く廣き、鳥獸の鳴き動き、草木の生ひ茂れるは、地の文なり。かくの如く天地の内、四時の行はれ、百物のなれる有様、目の前にみちく、て、人の見る事を喜ばしめ、心を感じしむること、大なる樂しみなるかな。これを樂しまむ人は眼力を以て境界とし、四時を以て良辰として、其の樂しみ何ぞ唯人間三公の貴き、萬戸侯の富に比べむや。よく心をとめて翫ばむ

人は、其の樂しみ極りなかるべし。

いでや天地の内にみちたるけしきの、樂をいはむ。春は先づ一夜のほどにあらたまの年たちかへる朝の空の光、心づからにや、舊年にかはりて長閑けし。陸月はことたつとて、貧しき家にも、春盤などいふものを設く。又かはらけとりいで、おほみきすゝめて、まづつとめて父母にことぶきし、次にみづから祝し、賓客にももてなすさまなど、つねにかはりて、いとなむいみじう珍らかなる。時は今四つの始めなれば、空のけしきやうく、引きかへ、こち風ゆるく吹きて、氷とけ、遠き山邊に霞のうすくたなびける、さまざまに物けざやかに見えて、冬の空にたちかはれる粧、まづ春の來れるしるしあらはなり。かきねがくれに、冬より残れる雪の、ところくはだれに見ゆるも、去年の名残をしむべし。まちわびし梅の句、百花に先だち、春の消息を得てよろこぶべし。谷を出で高きにうつる鶯

はだれ

ことたつ

なづさふ

の春をむかへて物わかき聲は初春の初音の今日にあへる、耳とまりてこほしく、花ならで身にしむものならし。花をめで鳥をうらやむは、是まづ春のたまものなり。是をはじめとして、猶行先はるかに榮ゆる春の豊なる恵みたのもし。千年を経べき緑の松も、今一入の色をまして、つねに見なれしも、彌めづらしくなづさはれぬ。韓文公が、「最是一年春好處。」といへりしは、早春のけしき、一年の内にて、ことに珍らかにすぐれたる故なるべし。きさらぎの程より、よろづ皆冬の心盡きて、空の色うらゝかに、けしきだちて、四方山も霞こめたる粧、ことに曙のけしき、譬ふべき物なく、あはれむべし。古の人春は曙と云ひけるもむべなるかな。日の光やぶしわかねば、かすならぬ垣根の内も冬にかはりて輝きいで、草木おひて、皆顔色を生じ、花まち顔になごやかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑になりもて行けば、人のわざも舊年より暇あきありて、いそが

古の人  
清少納言のこ  
と。清少納言は  
平安朝時代の女  
流文學者。枕草  
子の著者。  
春は曙  
枕草子の開卷に  
ある句。

おいみいわけみ

老杜

杜甫のこと、字は子美、少陵と號した。支那唐の詩人。西紀七〇九年、五十九年歿。



はしからず。日ながくして少年の如く、心閑にゆたけし。海の面日和よく、うら山もうらゝかに霞渡りたるけしき、いと遙けし。夕つけて日は既に入りぬれど残れる光猶久しきは、日の長さしるしなるべし。此の頃は、陽氣ののぼるけにや、童ども紙鳶といふものつくり、長き絲つけ、風にまかせて放てば高くあがり、雲の上まで遙けくたなびくを戯れとすれば、おいみいわけみ、空をあふぎ見るもをかし。野には又遊絲といふもの、霞のごとく、地より立ちのぼれり。又かげるふともいふ。莊周は之を野馬と云ふ。老杜が詩に、「落花遊絲白日靜」といへるも、是ならし。是みな常には無きものなるが、春めきていとめづらし。又垣根の草早く萌え出づるを見るにつけても、春の氣は下よりのぼるけぢめ、いと明らけし。花もやうく、咲きつゞきて、梅花既にうつろひて後新たなるは、わが國ならぬからもゝの花なるべし。桃、紅なるは、たなびく雲の

面影のたつ心地す。李、白きは消えがての雪の、梢に残れるかと思えて、いとうるはし。

櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動かしてえならぬ眺めなれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも、第一の見ものなれば、梅散りて後、此の頃のこと花は皆けおされぬ。されど、日頃待たせ待たせてやうく、咲けるが、飽くまで見る程もなく疾く散るは、又うらめし。「よしさらば散るまでも見じ山櫻花のさかりを面影にして」と古の人の詠みけむも、後の思ひ出にせむとにや、情深し。此の折から春雨のしきく、ふれば、我がやどの園の櫻は如何にあらむと、うしろめたし。柳緑に花紅にして、春の色をゑがき出せるは、いと麗しき眺めなり。

けおさる

よしさらば云々  
續古今集、藤原  
爲家の歌

(樂 訓)

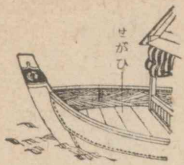
平家物語  
十二卷。作者未詳。平家の興亡を録したもので、人生の無常観が中心となつてゐる。

判官  
源九郎判官義經

五つぎぬ



舟のせがひ



さるほどに、阿波讃岐に平家を叛いて源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺、この洞より、十四五騎、二十騎うち連れうち連れ馳せくるほどに判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕ぎ寄せ、渚より七八段許りになりしかば、舟を横さまになす。あれはいかにと見るところに、舟の中より年のよはひ十八九許りなる女房の、柳の五つぎぬに紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを、舟のせがひに挟み立て、陸に向つてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに。」と宣へば、射よとにこそ候ふらめ。但し大將軍の矢おもてに進んで、けいせいを御覽

てだれ

ぜられむところを、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候ふらむ。」と申しければ、判官、味方に射つべき仁は誰かある。」と問ひ給へば、てだれども多う候ふなかに、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與市宗高こそ小兵には候へども、手はきいて候。」と申す。判官、證據があるか。」「さん候。かけ鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官、さらば與市呼べ。」とて召されけり。

與市その頃は、未だ二十許りの男なり。裾かちに赤地の錦をもつて、おほくび、はたそでいるへたる直垂に、萌黄緘の鎧着て、あしじろの太刀を佩き、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合せて、はいだりけるぬための鎬をぞさし添へたる。重藤の弓脇に挟み、胃をば脱いで高紐にかけ、判官の御前に畏る。判官、いかに與市。あの扇の真中射て、敵に見物せさせよかし。」と宣へば、

おほくび  
はたそで

ぬための鎬

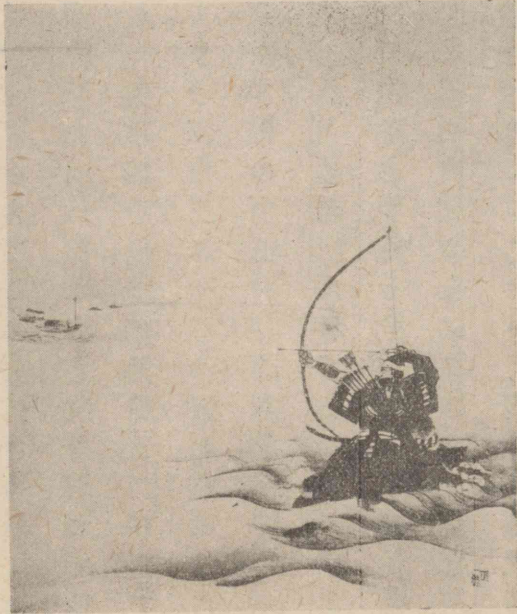
與市仕るとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き味方の御弓矢のきずにて候ふべし。一定仕らむずる仁に、仰せつけらるべうもや候ふらむ。」と申しければ、判官大きに怒つて、今度鎌倉を立つて西國へ向はむずるものどもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜむ人々は、これより疾うく、鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。與市重ねて辭せば、悪しかりなむとや思ひけむ、さ候はば外れむをば存じ候はず。御説で候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて、御前を罷り立ち、黒き馬の太う逞しきに、まるほやすつたる金覆輪の鞍おいて乗つたりけるが、弓取りなほし、手綱はいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。

まるほや

味方の兵ども、與市が後ろを遙に見送つて、この若者一定仕らうずると覺え候。」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海のなか一段許りうち入つたりけれど

二月十八日  
壽永三年(八四四)

も、なほ扇のあはひは七段許りもあらむとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻許りのことなるに、をりふし北風激しう吹き



くつばみ

(種百畫史) 市與須那

ければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげゆりすゑて漂へば、扇も串に定らずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。何れも何れも、晴ならずとい

ふことなし。與市目をふさいいで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇



十二束三ぶせ

の真中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再びおもてを向ふべからず。今一度本國に歸さむと思召さば、この矢外させ給ふな。」と、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與市鎬を取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふでう、十二束三ぶせ、弓は強し、鎬はうら響くほどに長鳴りして、あやまたず扇の要際一寸許りおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鎬は海へ入りければ、扇は空へぞ上りける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の日出したるが、夕日に輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬゆられけるを、沖には平家<sup>みなばた</sup>を叩いて感じたり。陸には源氏箆を叩いてどよめきけり。

二 一 ぼ ま れ

一 初 瓜

御堂關白  
藤原道長。  
解脫寺の僧正觀修  
姓は紀。園城寺座主。寛弘五年(二交)歿。  
晴明  
阿倍晴明。平安時代の有名な天文博士。  
忠明  
丹波忠明。

御堂關白殿、御物忌に、解脫寺の僧正觀修、陰陽師晴明、醫師忠明、武士義家朝臣、參籠して侍りけるに、五月一日、南都より初瓜を奉りたりけるに、御物忌の中に取り入れられん事、いかゞあるべき。」とて、晴明に占はせられければ、晴明うらなひて、一つの瓜に毒氣さふらふよしを申して、一つとり出したり。「加持せらるれば毒氣顯れ侍るべし。」と申しければ、僧正に仰せて加持せらるゝに、しばし念誦の間に、その瓜はたらき動きけり。その時忠明に、毒氣治すべきよし仰せらるれば、瓜を取りまはしく見て、二所に針を立ててけり。その後瓜はたらかずなりにけり。義家に仰せて、瓜をわらせられければ、腰刀をぬきてわりたれば、中に小蛇わだかまりてありけり。

針は、蛇の左右の眼に立ちたりけり。義家何となく中をわると見えつれども、蛇の頭を切りたりけり。名をえたる人々のふるまひかくの如し。ゆゝしかりける事なり。この事、いづれの日記に見えたりといふことを知らねども、普く申し傳へて侍り。

(古今著聞集)

二三 舟の才

御堂關白、大井川にて遊覽し給ふ時、詩歌の船をわかちて、各、堪能の人々を乗せられけるに、四條大納言に仰せられて曰く、「いづれの舟に乗るべきぞや」と。大納言曰く、「和歌の舟に乗るべし」とて乗られけり。さてよめる、

朝まだき嵐の山の寒ければ

ちるもみぢ葉を着ぬ人ぞなき

後にいはれけるは、「いづれの舟に乗るべきぞと仰せられしこそ、

四條大納言  
藤原公任。

仰せられしこそ  
……せられしか

作りたらしか  
ば……名をあげ  
てまし

經 信

姓は源。歌人。  
承徳元年(一〇五七)  
歿、年八十二。

白河院

白河天皇。

西 川

大堰川のこと。

心おごりせられしか。詩の舟に乗りて、これほどの詩を作りたらしかば、名をあげてまし。」と後悔せられけり。

帥民部卿經信卿、また此の人に劣らざりけり。白河院、西川に御幸の時、詩歌管絃の三つの舟を浮べて、その道の人々をわかちて乗せられけるに、經信卿遅參の間、殊の外に御氣色悪しかりけるに、とばかり待たれて參りけるが、三事かねたる人にて、汀に跪きて、「やゝ、何れの舟にても寄せ給へ。」といはれたりけり。時にとりていみじかりけり。かくいはむ料に遅參せられけりとぞ。さて管絃の舟に乗りて詩歌を獻ぜられたりけり。三舟に乗るとはこれなり。

(古今著聞集)

芥川龍之介  
小説家。東京市  
の人。昭和二年  
歿。年三十六。

馬琴

本名は瀧澤解。  
小説家。嘉永元  
年(一八二〇)歿。年  
八十二。

弓張月

「椿説弓張月」は  
源為朝のことを  
書いた歴史小  
説。

南柯夢

「三七全傳南柯  
夢」は傳奇小説。  
八犬傳

南總里見八犬

傳「は里見家に  
仕へた八豪傑の  
ことを書いた小  
説。馬琴の代表  
作。

端溪の硯

支那廣東省の端  
溪はよい硯石を  
産する。

蹲蟻の文鎮

蹲まれるみづち  
(蟻)を象つたつ  
まみ有る文鎮。

二三 戲作三昧

芥川龍之介

「これは初から書き直すより外はない。」

馬琴は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向うへつ

きやると、片肘ついてごろりと横になつた。

が、それでもまだ氣になるのか、眼は机上を

離れない。彼は此の机の上で弓張月を書

き南柯夢を書き、さうして今は八犬傳を書

いてゐる。此の机の上にある端溪の硯、蹲

蟻の文鎮、墓の形をした銅の水差、獅子に牡

丹を浮した青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立、さ

ういふ一切の文房具は皆彼の創作の苦しみに、久しい以前から親

しんでゐる。それらを見るにつけても、彼は今の失敗が彼の一生



瀧澤馬琴

の勞作に暗い影を投げる様な、彼自身の實力が根本的に怪しくな  
る様な思はしい不安を禁ずることが出来ない。

「自分はさつきまで本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐ  
た。が、それもやはり事によると人並に己惚うぶぼれの一つだつたかも  
知れない。」

かういふ不安は彼の上に、何よりも堪へ難い落寞たる孤獨の情  
を齎した。

彼は机の前に身を横たへたまゝ、親船の沈むのを見る其の船長  
の眼で、失敗した原稿を眺めながら、靜に絶望の威力と戦ひ續けた。  
若し此の時、彼の後ろの襖がけたゝましく開けはなされなかつた  
ら、さうして「お祖父様只今」といふ聲と共に柔らかい小さな手が彼  
の肩へ抱きつかなくなつたら、彼は恐らく此の憂鬱な氣分の中にい  
つまでも鎖されてゐたことであらう。が、孫の太郎は襖を開ける

齎齎齎

や否や、子どものみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢ひよくとび上つた。

「お祖父様只今。」

「おゝ、よく早く歸つて來たな。」

此の語と共に、八犬傳の著者の皺だらけな顔には別人のやうな悦びが輝いた。

茶の間の方ではかん高い妻のお百の聲や、内氣らしい嫁のお路の聲が賑やかに聞えてゐる。時々太い男の聲がまじるのは、折から悴の宗伯も歸り合せたのらしい。太郎は祖父の膝に跨りながら、それを聞き澄しでもするやうに、わざと眞面目な顔をして天井を眺めた。外氣に曝された頬が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父様にね。」

栗梅の小さな紋附を着た太郎は突然かういひ出した。考へようと努力と、笑ひたいのを耐へようと努力とで、ゑくぼが何度も消えたり出來たりする。それが馬琴には自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日。」

「御勉強なさい。」

馬琴はたうとう噴き出した。が、笑の中にすぐ又語をつぎながら、

「それから。」

「それから——えゝと——疝癢を起しちやいけませんつて。」

「おやく、それつきりかい。」

「まだあるの。」

噴憤

「どんなことが。」

「え、と——お祖父様はね、今にもつと偉くなりますからね。」

「えらくなりますから。」

「ですからね、よくね、辛抱おしなさいって。」

「辛抱してゐるよ。」

馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつとく、よく辛抱なさいって。」

「誰がそんなことをいつたのだい。」

「それはね。」

太郎は悪戯さうに、ちよいと彼の顔を見た。さうして笑つた。

「だあれだ。」

「さうさなあ。けふ御佛参に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて来たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から半分腰をもたげながら、顎を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「浅草の観音様がさういつたの。」

かういふとともに此の子どもは家内中に聞えさうな聲でうれしさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛び退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに、小さな手を叩きながら、ころげるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは此の時である。

彼の唇には幸福な微笑が浮んだ。それと共に彼の眼にはいつか

刹殺

涙が一ぱいになつた。此の冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふところではない。此の時、此の孫の口からかういふ語を聞いたのが不思議なのである。

「観音様がさういつたのか。勉強しろ、疝癩を起すな、さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十幾歳の老藝術家は、涙の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。其の夜のことである。

馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は、家内のものも、此の書齋へは這入つて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

始め筆を下した時、彼の頭の中には、かすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と、筆が進むに従つて、其の光のやうな

## 神來の興

ものは、次第に大きさを増して來る。經驗上、それが何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして筆を運んで行つた。神來の興は火と少しもかはりがない。起すことを知らなければ、一度燃えても、すぐに復、消えてしまふ。

「あせるな。さうして出来るだけ深く考へる。」

馬琴はやゝもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分には、が、頭の中にはもうさつきの星を砕いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうして、それが刻々に力を加へて來て、否應なしに彼を押しやつてしまふ。彼の耳には何時か蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼には圓い燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上を這り始める。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆ど必死に書き續けた。頭の中の流れは、丁度空を走る銀河のやうに、滾々として何處か

らか溢れて来る。彼は其の凄しい勢を恐れながら、自分の肉體の力が萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。

「根かぎり書き續ける。今自分が書いてゐることは、今でなければ書けないかも知れないぞ。」

しかし、光の霧に似た流れは、少しもその速力を緩めない。かへつて目まぐるしい飛躍のなかに、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つて来る。彼は遂に全く其の虜となつた。さうして一切を忘れながら、其の流れの方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

此の時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは利害でもなければ愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とくに眼底を拂つて消えてしまつた。在るのは、唯不可思議な悦びである。

## 三昧の心境

或は恍惚たる悲壯の感激である。此の感激を知らないものにと、うして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の嚴かな魂が理解されよう。こゝにこそ「人生」は、あらゆるその殘滓を洗つて、まるで新しい鑽石のやうに、美しく作者の前に輝いてゐるではないか。

其の間も茶の間の行燈のまはりでは、姑のお百と嫁のお路とが、向ひ合つて縫物を續けてゐる。太郎はもう寝かしたのであらう。少し離れた所には、脾弱らしい宗伯が、さつきから丸薬をまるめるのに忙しい。蟋蟀はこゝでも、書齋でも、變りなく秋を鳴きつくしてゐる。

(芥川龍之介集)

瀧澤馬琴  
一二〇頁頭註參照

二三 芳流閣

瀧澤馬琴

福の倚る所  
「福所」倚福  
禍所伏、孰知  
其極、  
(老)子

古河  
下總國(茨城縣)  
猿島郡古河町

古の人謂はずや、禍福は糾ふ繩の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所はた禍の伏する所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極を知らむ。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀心にしめつ、身につけつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、遙々古河へ齎して、名を揚げ、家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の刃は舊のものならで、わが身を劈く譬とぞなりし。憾をこゝに釋くよしもなく、絳急にして意外にあり。纔に當座の辱しめを避けばやと思ふばかりに、夥多の圍みを切り開きて、芳流閣の屋の上に攀登れども、左右に脱れ去るべき道のなければ、其處に必死を窮めたる心の中はいかなりけむ、想ひやるだにいと痛まし。

檐擔

坂東太郎  
關東第一の大  
河、利根川。長  
さ二七八軒。  
まぶし

されば又、犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舎に繋がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよとて、愁ひに擇み出されつ。他の憂ひを身の面目に、今更用ひられむこと、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の燄熾をわたる敷瓦は、凸凹隙なく、波濤に似て、下には大河滔々たる、こ生死の海に朝る、流れは名に負ふ坂東太郎、水際の舟楫を絶え、進退既に谷りし、敵にしあればいかでわれ、つなぎとめむと、颯の樹傳ふ如くさらく、と、登りはてたる三層の、屋根にはまぶしさすよしもなく、かたみに隙を窺ひつゝ、にらまへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。



成氏  
古河公方足利成氏  
横堀史在村  
成氏の老臣。

墨氏  
墨翟。支那周の  
人。  
魯般  
公輸般。支那魯  
の人。

膳臣巴提便  
欽明天皇七年  
三月百濟に使し  
た時、虎穴に入  
つて虎を刺し殺  
した。  
富田三郎  
和田義盛の家  
來。源實朝の面  
前で長約〇、二  
七米、方約〇、二  
米の大鹿の角二  
箇を一度に折つ  
た。

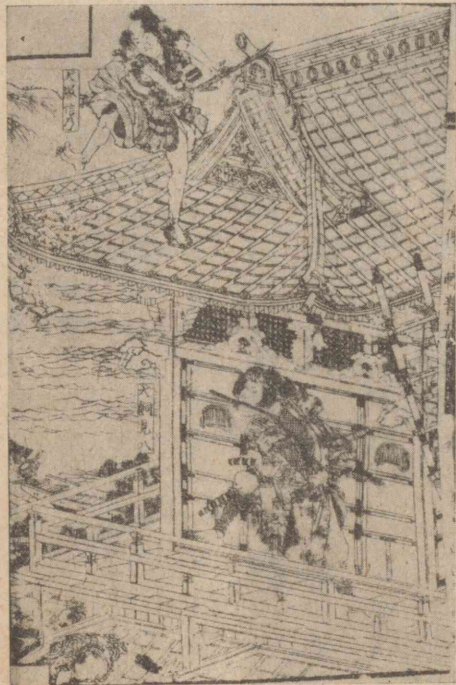
廣庭には成氏朝臣横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし床几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。亦閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖つき立て、組んで落ちなば撃ちとめむとて、うなじを反らして之を觀る。加之外面は、連綿として杳なる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。渠鳥ならねど羅に入りぬ、獸ならねど狩場にあり。三寸息絶ゆれば、粹みな休まむ。脱れ果てじと見えたりけり。其の時、信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追ひのぼらむとせし兵等を、斬りおとしつる後は、絶えて近づく者もなきに、今唯ひとり登りきぬるは、よに覺ある力士ならむ。しやつは是れ膳臣巴提便が、虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が、鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫一箇の敵なり。引組んで刺しちがへ、死するに難きことやはある。よき敵ござんなれ、目に物見せむ。」と、血刀を袴の稜もておし拭ひ、高瀬の如き方椀に、立つたるまゝに寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫無當の敵なり。さりとても搦めかねて、他の援を借ることあらば、獄舎の中より此の役義に、擇み出されしかひもなし。からめとるとも、撃たるとも、勝負を一時に決せむものを。」と思ひにければ、ちつとも擬議せず、「御詫さふ。」と呼びかけて、もつたる十手をひらめかし、飛ぶが如くに方椀の、左の方より進み登りて、組まむとすれども寄せ附けず。「心得たり。」と、鋭き太刀風に、撃つをはつしと受け留めて、拂へば、透さず、切りこむ刀尖をさへて流す一上一下、迂る蕘を踏みとめて、しきりに進む捕手の秘術、かなたも劣らぬ手練の働き、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負を判かざれば、廣庭なる

遮莫  
方椀

るか。遮莫一箇の敵なり。引組んで刺しちがへ、死するに難きことやはある。よき敵ござんなれ、目に物見せむ。」と、血刀を袴の稜もておし拭ひ、高瀬の如き方椀に、立つたるまゝに寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫無當の敵なり。さりとても搦めかねて、他の援を借ることあらば、獄舎の中より此の役義に、擇み出されしかひもなし。からめとるとも、撃たるとも、勝負を一時に決せむものを。」と思ひにければ、ちつとも擬議せず、「御詫さふ。」と呼びかけて、もつたる十手をひらめかし、飛ぶが如くに方椀の、左の方より進み登りて、組まむとすれども寄せ附けず。「心得たり。」と、鋭き太刀風に、撃つをはつしと受け留めて、拂へば、透さず、切りこむ刀尖をさへて流す一上一下、迂る蕘を踏みとめて、しきりに進む捕手の秘術、かなたも劣らぬ手練の働き、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負を判かざれば、廣庭なる

主従士卒は、手に汗握らざるものなく、瞬きもせず、氣を籠めて、見る  
めもいとゞはるかなり。

さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が、武藝に、敵を得たりけり、と  
思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づる迄、寄せては返す太刀音掛  
聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風起り、二龍青潭に戦ふ時、沛然と



未曾有

芳流閣

して雲起るも、かくぞ  
あるべき。春ならば  
峯の霞か、夏ならば夕  
の虹か、と見るばかり  
なる、いと高き閣の棟  
の上に、死を争ひし爲  
體よに未曾有の晴業  
なれば、見八は被籠の



の決戦

鎖、肱當の端を裏かく  
迄に、斬り裂かれしか  
ど、太刀を抜かず。信  
乃は刀の刃も續かで、  
初に淺痕を負ひしよ  
り、次第に疼を覺ゆれ  
ども、足場をはかりて、  
撓まらず去らず、疊みか

けて、撃つ太刀を見八右手に受け流して返す拳につけ入りつと、や  
つと、かけたる聲と共に、眉間を望みて礮と打つ、十手を丁と受け止  
むる、信乃が刃は鏝際より折れて遙に飛びうせつ。見八得たり、と  
むづと組むを、そがまゝ左手にひきつけて、かたみに利腕しかと執  
り、ねち倒さむと、曳聲合して、揉みつ揉まるゝ力足、此彼齊しくふみ

迂らして、河邊の方へころくと身を轉ばしし覆車の米苞坂より落すに異らず、勾配險しき棧閣に、削りなしたる堯の勢、止るべくもあらざめれど、かたみに執つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の底には入らで、程もよし水際に繋げる小舟の中へ、打重なりつゝ、どうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水煙、縋ちようと張りきつて、射る矢の如き早河の眞中へ吐き出されつ。しかも追風と退く潮に、誘ふ水なる下り舟、往方も知らずなりにけり。

(南總里見八犬傳)

次の文中の各單語の品詞名を問ふ、動詞に限り其の活用の種類をも述べよ

- イ、故に苟も文章を書かうとする者は先づこの自覺から出發すべきである(卷三ノ一三五頁)
- ロ、彼は忌はしい不安を禁ずる事が出来ない(二二二頁)
- ハ、鳥ならねど羅に入りぬ、脱れ果てじと見えたりけり(二三三頁)

徳富猪一郎

號は蘇峰。思想評論家。貴族院議員。東京日新聞社。熊本縣の人。文久三年(五三)生。

仲達 支那魏の名將。司馬懿の字。

祁山・渭水 共に支那甘肅省鞏昌府に在る。

孔明 支那蜀の丞相。諸葛亮の字。

玄徳 支那蜀の昭烈帝。劉備の字。

二四 知己 己 難

徳富猪一郎

朋友にして知己ならざるものあり、知己にして朋友ならざるものあり。否、知己は敵人にもこれあるべきなり。かの仲達が祁山・渭水の空營を按じて、天下の奇才なり。」と、叫びたるを見れば、かの孔明のためにはよき知己なりしにあらざや。孔明は實に二箇の知己をもてり、敵にては仲達、味方にては玄徳。

人は何人とも朋友となるを得べし。情と情と相接する日は即ち朋友の出で来る時なり。觸るれば情を生じ、着すれば情を生じ、久しければ情を生じ、屢すれば情を生ず。竹馬の友、同窓の友、同郷の友、同業の友、同位置の友、同臭味の友、友も亦類多し。然り、天下何人か友ならざるものあらん。少しく心をとめて談話すれば、東京より横濱に至るまでの汽車中にてすら、幾多の友人は得らるゝに

あらずや。

知己に至りては然らず。天下百千の朋友を得るは易けれども、一人の知己を得るは難し。知己とは何ぞ。われよりすれば、かれに知らるゝなり。かれよりすれば、われ知るなり。

君ならでたれにか見せむ梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る

これ實に知己に對する情なり。知己實に難し。故に一の知己を得れば、殆ど一の生命を得たるよりも嬉しく、一の知己を失へば、一の生命を失ひしよりも悲し。鍾子期死して伯牙絃を絶ち、荆軻死して高漸離また筑を撃たず。その心まことに憐むべきものなり。

楊巨源の詩にいはく、

詩家清景在新春、

柳嫩鵝黃色未勻。

君ならで云々  
紀友則の歌。「古今集」にある。

鍾子期・伯牙  
共に支那戰國時代初期の人  
荆軻・高漸離  
共に支那戰國時代末期の人

楊巨源  
中唐の詩人。

嘻一嬉

若待上林花似錦、

出門皆是看花人。

と。龍を見て龍となす、難きに非ず。一寸の蛇を見て、早くもその雲を起し霧を吐き、茫洋として玄間を窮め、日月に薄るを知る、これ難きなり。知己の難きは、その未だ發達せざる時に於て、他日の發達を卜するにあり。その現れたる嘻笑怒罵の外に、隠れたる胸間の神祕を會得する事の難きにあり。人はその半身以上は秘密なり。知己はよく鍵なくしてこの秘密を知る。固より他のわれに語るを待たざるなり。語るを待ちてこれを知るが如き、これ豈知己ならんや。

かくて、知己の感は又兄弟の間にもあり。東坡曾て獄に投ぜられて重辟に處せられんとするを聞き、その弟子由に書を贈りていはく、

是處青山可埋骨、

他年夜雨獨傷神。

東坡  
七〇頁頭註參照。  
子由  
蘇轍の字。軾の弟。文學者。

賈生

賈誼。支那漢代の文章家。洛陽の人。文帝に仕

屈原

名は平。文章家。支那楚の人。西紀前二九五年歿。年六十三。

孟軻

世に孟子といふ。周の亞聖。魏王の二十六年(西紀前二九〇)歿。年八十四。

孔子

魯の人。名は丘。周の敬王四十二年(西紀前四八二)歿。年七十三。

周公

名は旦。周の文王の子。西紀前一二九九年歿。年五十六。

キケロ

ローマの文學者(西紀前三〇一)歿。年五十六。

スキピオ

ローマの勇將(西紀前三三二)歿。年三十二。

與君世々爲兄弟

又結來生未了因

と。その同胞の情、元より篤し。況や、これに重ねるに、雙々知己の恩愛を以てするに於てをや。死後なほ兄弟となり、その未了因を繋がんといふ。世の兄弟にしてかくの如き知己の感あるもの、古往今來それいくばくぞ。

知己は又、敵人にあるのみならず、生面の人にもあり、或は古人に對してもあり。知己の交感は時を問はず、處を論ぜず。賈生が屈原を慕ひ、孟軻が孔子を慕ひ、而して孔子が周公を慕ひて、「吾復た夢に周公を見ず。」といひしが如き、その言の懇到深切、感ずべきにあらずや。キケロ曰く、「余に對しては、スキピオなほ生けるなり。しかして以て常に生くべし。」と。嗚呼、宇宙茫茫、たゞ知己ありて以て繋ぐところあり。知己なくば人生は荒野のみ、荆棘のみ。人は知己の爲にその憂苦患難を共にするを厭はず。甚しきは、

魏徵  
唐の太宗の侍中。  
人生感意氣云云  
「唐詩選」にある。

その一身を投じて知己の爲に犠牲となるものあり。彼等は漫に犠牲となるにあらず、實に知己の爲に犠牲となるなり。苟も一の知己を得る、生命を捨つるも悔いず。況や區々たる浮世の名利をや。魏徵が「人生感意氣功名誰復論。」といふ句は、實に人の深奥なる思想を吐露したるものなり。  
人生の最も清福なるは知己を持てるにあり。朋友中、知己を持てるは最も清福なり。しかしてその兄弟姉妹父母の中に知己を持てるは、最も大なる清福なり。かの東坡子由のごとく、風雨の夜、兄弟床をならべて千古の懷を敘するを得ば、天下またこれに優る清福なからん。

(靜思餘錄)

坪内逍遙  
名は雄藏。文學  
博士。英文學者。  
名古屋市の人。  
昭和十年二月  
歿。年七十七。

いなのみ  
長柄堤  
大阪府東淀川區  
豊崎町を流れる  
長柄川の堤。



片桐且元  
豊臣秀吉・秀頼  
の臣。元和元年  
(一六二五)歿。年六  
十。  
茨木  
攝津國(大阪府)  
三島郡茨木町。  
くだけ

二五 長柄堤の訣別

坪内 逍遙

晨鷄再び鳴いて残月薄く、征馬しきりに嘶いて、行人出づ。はや  
分れゆく横雲や、残の星を一つづつ、鐘がけし行くいなへの、長柄  
堤に秋閑けて、一叢蘆に風黒く、有明凄き淀川水、逝きて歸らぬ浪の  
音、狭霧に咽び白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、哀れはいとゞまさるら  
ん。片桐市正且元は居城茨木へ立退かんと、従ふ郎黨一百餘人、寅  
の刻に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづくと、長  
柄堤に差懸る。

後には何か一思案、寂然として駒立つる、長柄堤の有明がた、時に  
轉る小鳥の聲、川霧やうく、晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、  
ほの見え渡る賤が屋に、一筋騰る朝煙、くだけかけの聲、勇ましく、生氣  
溢るゝ東の空には似ぬや、いり方の、月すさまじき柳蔭、枯葉枝疎に

して風飄々、見る目も昏しをちかたに、おぼろくと現るゝ、名にお  
ほ阪の四衢八街、悄然として淋しげに、一棟高く聳えしは、

市おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬  
年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下薨れさせたまひて後、  
まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は離れ、取りわけ加藤肥  
州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存する者には才略  
乏しく、阿附黨同して相鬪げば、大政所の御方さへ、當家を他所にみ  
そなはし、浮世離れし御有様、唇齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、  
金城湯池も其の甲斐なく、

いひかけて聲曇らせ、

市須彌より重き御遺命、夢聊もわすれざれど、御運の末か情なや、此  
の且元のすること爲すこと、鶺鴒の嘴とくひちがひ、兩家を繋ぐ絆に  
もと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘廬舍那佛の御

南山不落

南山は終南山の  
こと。支那周  
の都であった豊  
鎬の南に在る。

故殿下

豊臣秀吉をい  
ふ。殿下の稱は、  
昔は、攝政・關白  
にも用ふ。

加藤肥州

加藤清正。肥後  
熊本の城主。慶  
長十六年(一六三  
九)歿。年五十。

大政所

攝政關白の母。  
こゝは秀吉の妻  
をさす。

須彌

佛教にいふ須彌  
山。大海の中に  
在つて八萬由旬  
といふ。

千姫君

徳川秀忠の女。  
秀頼の室とな  
る。

胸にも、大慈大悲は宿らざるか。「御家とこしなへに康かれ。」と、祝ひし文字が本となり、降つて湧いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること、御運の末といひながら、

詠へず馬よりとび下り、彼方に向ひ平伏なし、

市「これしかしながら、不肖且元愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罫に罹り、仰せつけられし御遺命に、背き奉る今日の仕合せ、不忠とも言ひ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、且元が此の陽はちぎるゝばかり。償ひ難き不臣の罪は、あの世で御詫び仕らん。御赦しなされて下さりませ。」

在すが如く兩手をつき、人目なければやゝしばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

市「あゝ、われながら不覺のいたり。我が大罪の御詫びよりも、差懸

詫—詫

るお家の安危。長門守には如何にせし心許なきことどもぢやな  
あ。」

すかしながむる折こそあれ、遂に聞ゆる蹄の音程もあらせず只  
一騎、残霧つんざき一散に、汗馬に中を走り來る。木村長門守重成、  
長市正殿に候な。」市「長門殿、待ちかねしぞ。」

いふ間にか、け寄るくつわづら、右手におり立ち顔見合せ、言葉は  
なくてそゞるにも、まづ袖濡るゝ朝露や、風颯々たる枯柳の枝、入  
りがたの月ゆらめきて、老いゆく秋の淋しさを、長柄堤に留むら  
ん。

長最早豊臣の御社稷も、愈末となつたるか。棟梁と頼む足下まで、  
佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるゝとは。  
某、圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑蒙り、出仕を遠慮の  
其の間に、思ひ懸けぬ珍變あり。續いて足下の御討手と昨朝承り、

木村長門守重成  
重成の子。秀頼  
の臣。元和元年  
(一六二五)戦死、年  
二十一。

社稷

織田入道  
織田信雄常眞入道  
寛永七年(三三〇)歿、年七十

大野  
大野修理亮治長  
渡邊  
渡邊内藏介胤

大いに驚きすぐにお表へ参入すれば、城内議論沸くが如く、織田入道殿日頃に似氣なく激論の末、席を蹴立て只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野渡邊等が我意暴慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで



(劇) 面場の別訣堤柄長

刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ひ甲斐なさ。」  
悔むを且元押宥め、

直いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢申しし如く、お家の大仇は彼等にあらざ。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にはあらじ。某とても此の度の一條、遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰返すは愚痴の至、大切なるはお家の後事、某退去のこと、關東に聞えなば、破綻生ぜんこと治定なるに、昨日までは、去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。此の上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。」長して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」直されば今御城に兵糧、金銀は乏しからず。まつた猛將、勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。」長して其の智謀の將とは。」直いま九度山に隠れ忍ぶ、信州土田前の城主、眞田安房守が二男左衛門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戦以來、關東



九度山  
紀伊國(和歌山縣)伊都郡、高野山北谷の山村。

眞田安房守  
名は昌幸。慶長十三年(三三六)歿、年六十五。



長曾我部盛親  
元親の第四子。  
慶長十九年(三七  
四)歿。  
後藤又兵衛基次  
秀頼の臣。元和  
元年(三七五)歿。

紀州川  
紀の川。和歌山  
市の北を流れ  
る。

の跋扈を怒り、螫して世の態を窺ひ居るを、先年御味方となし置いたり。事起らば上使を以て急ぎかれを招かるべし。合戦の進退は一切彼の人に任せられよ。其の他關ヶ原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黒田家の浪人、後藤又兵衛基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫て因みはつけ置きたり。上御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配なり。長してまた籠城となつたる曉、敵を防がん手配は。市、其の儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐り出させ、商業の爲といつはり、紀州川の川上より浪華津におし流させ、御船入に積み置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に互るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。長、それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。市、甲冑兵具も

速水  
名は守久。秀頼  
守護の七隊長の  
一。  
御宿  
名は正倫。元は  
武田氏の臣。後  
北條氏に仕ふ。  
和久  
名は宗是。秀吉  
の書佐。  
先祖佐々木  
近江守信綱。

乏しからず。長城は名に負ふ南山不落。市、眞田、後藤の智勇をもて、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護するときんば、長、たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、六十餘州の兵を盡し、四方八面より攻め寄すとも、市、中々三年、四年がほどに攻め落さんこと難かるべし。長、まつた若年には候へども、愈、軍始まりなば、われ亦一方を承り、速水、御宿、和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹き飜さん白旗は、先祖佐佐木が四つ目結ひ、君臣將士心を一にし、千變萬化の手を盡さば、金石も亦透りぬべし。利慾に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。此の上は仰に従ひ、此のこと君に言上なし、直ちに軍の手配せん。御心安かれ、市正どの。市、ほ、頼もしし頼もしし。只大切は上下の一致、必ず忠勤はげまれよ。とはいひながら、往時に照し、成り行く末をかんがみれば、長、淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大

大御所  
徳川家康

野渡邊。」市上御發明に渡らせらるれど、長 讒佞これを蔽ふがゆ  
ゑ、市地の利はあれども人の和なく、長 故太閤が御威武に、をの  
のき震ひ打伏しし、六十餘州の民草も、市天の時にや、大御所のお  
のづからなる徳風に、いつしか靡く世の有様。」長如何なれば、かく  
迄に、御運かたぶく西天の、市有明の影薄れつゝ、長 東天紅と八  
面に、かしましく鳴くくだかけは、市新日東天に昇るといふ、  
長世の成り行きの、二人影なるか。」

是非もなき世の有様と、入る方の月眺め入り、しばしは愚痴にを  
ちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほのくくと明けにけり。

二人さらばく。」

と、西東見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろく。嘶く駒の聲  
はして、立別れゆく兩人が、此の世に残す面影は、また見ぬ形とぞ  
なりにける。

(桐一葉)

澁澤榮一

子爵。實業家。埼  
玉縣の人。昭和  
六年歿。年九十  
二。

二六 現代青年に望む

澁澤 榮 一

時勢の推移によつて社會状態が變つて行く、そして社會状態が  
變つて行くと共に、それを反映する時代思想も變つて行くのであ  
るが、現代の青年について此の三者の移り變りを見ると、彼等は私  
共の青年時代とは違つて、一般に伶俐になつて居る。目先が利く  
やうになつて居る。しかしながら其の反面には、通弊ともいふべ  
き幾多の短所があるやうに思ふ。

其の短所の一つは、彼等が餘りに功を急ぐことである。どうか  
して早く世に出よう、知られようとあせりすぎることである。彼  
等はこれがために自己を廣告し、宣傳して、機會のある毎に自分を  
偉く見せようとする。そして其の一方に於て、大切な自己の修養  
を閑却する傾向がある。これは無論現代人一般の通弊ではある

閑却

が、特に之を前途のある青年に見るのは惜しむべき事である。修養を怠りながら徒らに功を急ぐのは、例へば商品の質は措いて問はず、イルミネーションで廣告して、其の存在を認められようとするやうなものである。

現代はすべてが廣告の世の中である。廣告が上手であれば商品が賣れる。殊に化粧品や賣藥などは、實質よりも寧ろ廣告で賣れるといふことであるが、人間が世に立つのは、化粧品や賣藥を賣るのとは全然譯が違ふ筈で、また違ふべき筈である。吾々は何よりも先づ實質を重んじ、修養を怠らないやうにしなければならぬ。若し常に修養を心に掛けて、内容の充實、實質の完成に努力するならば、何時かは必ず之を有効に役立てる時が来るであらう。出しやばつて知つた振りをし、自分を偉く見せようとするのは、常人自身には、榮達の近道と思はれるであらうが、第三者の公平な眼

狼狽

囊中の錐の如し  
「夫、賢士之處世也、譬若錐之處囊中、其末立見。」  
(史記、平原君列傳)

蹉跎



一 榮 澤 謙

からは、輕薄な、奥行のない人間、信賴して仕事を任せる事の出來ない人物と見られる結果になるのである。之に反して、平素修養を心掛けて居る人物は、何時、如何なる場合に於ても狼狽することがなく、而して事ある毎に、價値のある人間と云ふ事が證據立てられるのである。

支那の古言に、有爲の才人を譬へて、「囊中の錐の如し。」と云つて居るが、これは囊の中の錐が上から押されると、其の尖端を現すと同じやうに、實力を備へた人は、平時は人に知られずとも、事があれば必ず其の才能を顯すといふ意味である。

青年諸君は深く此の點を反省しなければならぬ。而して自分の力量不相應に功を急ぐのは、却つて將來の榮達を阻害し、蹉跎を

來す基である事を深く思ふべきである。

次に私は現代の青年が仕事に對して不平を抱く事を、甚だ遺憾に思つて居る。例へば、「自分は實力があるのに、世間では認められない。」とか、「良い地位を與へてくれない。」とか、「或は、自分は此の方面の知識を持つて居るのに其の方面の仕事を與へてくれない。」とかいふ不平は、屢、聞くところである。否、僅少の例外を除けば、今の青年の悉くが、殆ど共通的に、此の種類の不平を抱いて居ると云つてもよいであらう。併しながら、これは間違つた考へと言はなければならぬ。なぜかといふに、良い磁石が自然に澤山の鐵を吸ひつけるやうに、人間にも、實力があれば自然に力相應の仕事が與へられる筈だからである。

世の中に仕事は澤山ある。けれども一つの仕事に對して不平を言ふ人からは、すべての仕事は逃げて行くものである。それな

らどうすればよいかといふに、與へられた仕事を完全に、而して迅速に成し遂げる事が、まづ最も肝要であらう。與へられた仕事を、迅速に、完全に成し遂げる時は、求めずして信頼されるやうになり、而して自然に、第二、第三の仕事が與へられるやうになる。それは丁度良い磁石が、澤山の鐵を吸ひ附けると同じ理窟で、かくしてこそ、やがて價值ある人物として重用され、従つて將來の榮達を期することが出来る。

要するに、與へられた仕事は、どんな詰らない事でも自分の天職と心得て、不平を言はずに立派に仕遂げるやうにしなければならぬ。若し一つの仕事に對して、不平を抱いて怠けるやうな青年ならば、其の人は明らかに他の仕事をするのにも適してゐないので、さういふ青年は到底將來の榮達を望むことは出来ない。

吾々の青年時代には漢學が盛んで、其の中に説かれてゐる謙讓

天職

到一致

の美德といふのを大分重んじたものであつた。私は謙讓の心掛は、何時の時代にも必要だと思つて居るが、現今の新しい人達是一般に此の徳を重んじない、寧ろ之に反對の傾向を持つ排他主義、利己主義の思想に捉はれて居るやうである。此の流行からすれば、謙讓などいふことは時代遅れの思想と考へられるであらうが、しかしながら謙讓は決して時代遅れでもなければ、間違つた道德でもない。活社會に立ち、融和協調して他人の信用を得るには、どうしても此の徳が必要である。但し、謙讓と卑屈とは紛らはしいものであるから、取りちがへないやうによく注意しなくてはならない。謙讓とは、解り易く言へば出しやばらない事である。早く世に知られようとして、みだりに自己宣傳をしない事である。それは無論、必要な場合にも、知つて居る事を押隠して、知らない風を装ふがよいといふのではない。たゞ平生つゞまやかに身を持つて、

## 融和協調

専ら修養を積みといふのである。

また現代の青年には、概して老人の言ふことをば、「古臭い」とか「時代遅れだ」と云つて、排斥する傾向があるが、これも大きな間違である。時勢の推移するにつれて、思想も亦遷り變るのは當然であるが、倫理道德は水の流れのやうに、さう造作もなく移動するものではない。私は多年孔子の教を處世の活教訓として遵奉して居る。無論二千四百年前に説かれた孔子の一言一句が、悉く現代に當嵌まるといふ譯ではないが、しかし其の根本精神は、人間生活の活教訓とするに足るべき立派な道德だと思つて居る。大小の違ひこそあれ、老人の言ふことにも、やはり同様の取りどころがあるであらう。無論、舊習を墨守し時代に遅れるやうな事は、御互に大いに排斥しなければならぬが、さればと言つて、何でも新しくさへあれば良いといふやうな考へで、能く吟味も咀嚼もせず、新規の事

## 倫理

## 墨守

## 咀嚼

物を取入れるのは、最も慎まなければならぬ事である。

それから、現代の青年には、動もすれば空想に趨り過ぎる傾きがある。理想を高く立てるのはよいが、空想に趨ることは慎まなければならぬ。人間に理想がなかつたら、其の人は單に生きんがために働いてゐるに過ぎなくなる。それでは人間としての價値がないので、殊に青年に理想がなかつたら、青年としての存在の意義を有せぬことになるであらう。それ故、青年が高遠の理想を抱くのは、大いに結構なことであるが、一步を過つて空想の域に踏み込まないやう、返すくも注意しなければならぬ。

總じて、青年の第一の特色は、元氣の横溢してゐるといふことであるが、現代の青年は、伶俐になり過ぎた結果、一面に於て空想に趨る傾向があると同時に、他の一面に於て活氣に乏しい嫌ひがあるやうである。これは恐らく、餘りに目先の事ばかり考へる結果で

あらう。明治維新の大勢を馴致したのは、青年の力であつた。尤も幕末時代と今日とでは、時勢が異つて居るから、同一に論ずる事は出来ないが、青年の意氣はあのやうにありたいものである。此の意氣がなければ、到底大いに伸びることは出来ない。唯くれぐれも注意すべきは、空想と理想とを取違へず、遠大の理想を樹てて、之に向つて勇往邁進すべき事である。又こゝで特に注意すべきは、理想と實際とは必ずしも一致するものではないから、たとひ理想幻滅の場合に遭遇しても、決して失望落膽することなく、一層勇氣を奮ひ起して事に當る覺悟をすべきである。青年時代は思想の動搖し易い最も危険な時代である。此の時代にも、もし自暴自棄に陥るやうな事があつては、一生を誤る事になる。それにつけても大切なのは、修養で、平素修養を積んでさへおけば、如何なる場合にも、其の方針を誤るやうな事が無い筈である。

机上の空論

私は人間一生の中、活力の最も旺盛な青年期及び壯年期の人達に、最も多く望を囑する。凡べての仕事は、是等の元氣潑刺たる人達が中心となつて行ふべきであるが、さればと云つて先輩を無視することは宜しくない。青年及び壯年者は未來に生きるもので、洋々たる前途を持つて居る。之に對して、老年者は未來には貧しいが、其の代り豊富なる過去を有つて居り、幾多の實際経験を積んで居る。此の實際の経験といふものは、成功失敗、何れの経験たるに拘らず、後進者に對する生きた教訓で、机上の空論に勝ること萬萬であり、且金銭で購ふことの出來ぬ尊いものである。それ故青年諸君は、勉めて先輩に接して其の意見を敲き、経験を聞き之を參考資料として、着々と仕事をするやうに、而して前人の失敗を繰返さずして、立派に成功するやうに心掛くべきである。(青淵訓話集に據る)

新制國語讀本 卷六終

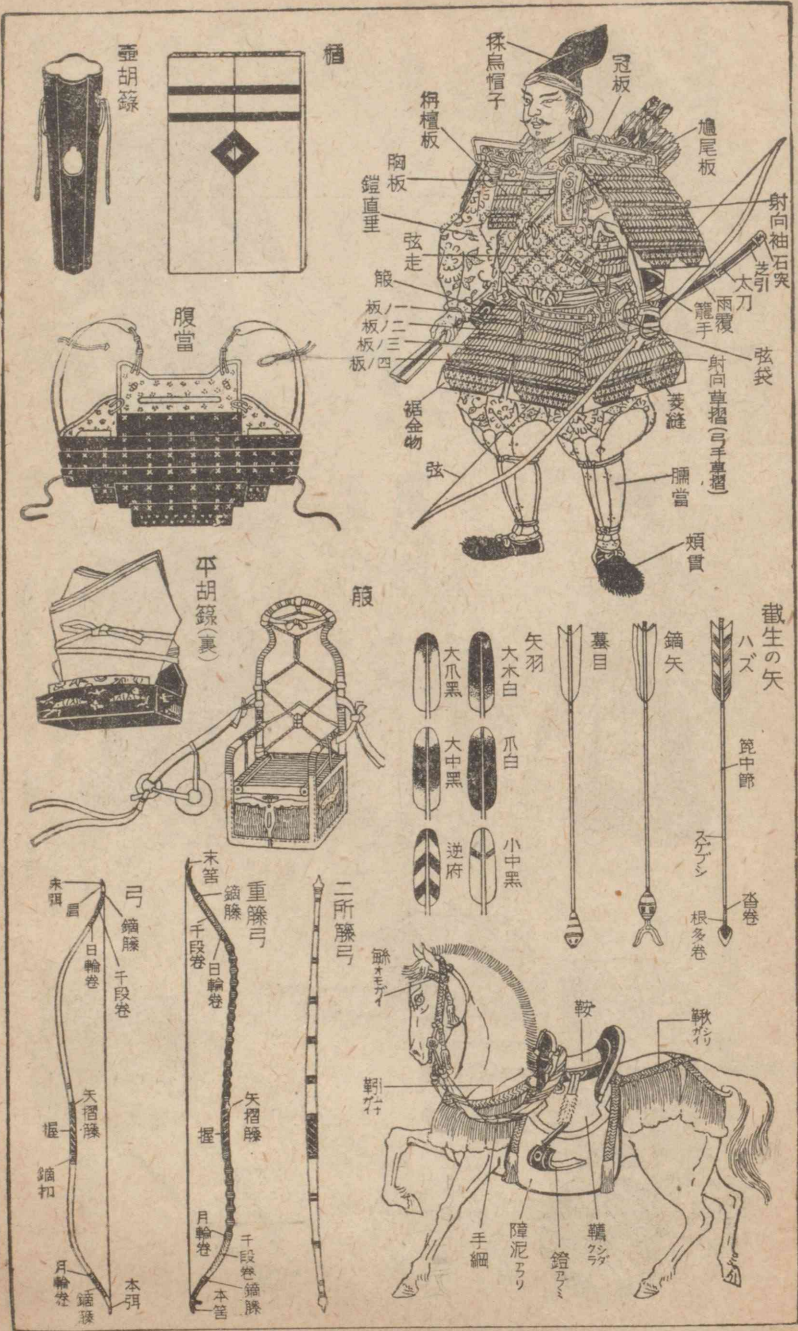
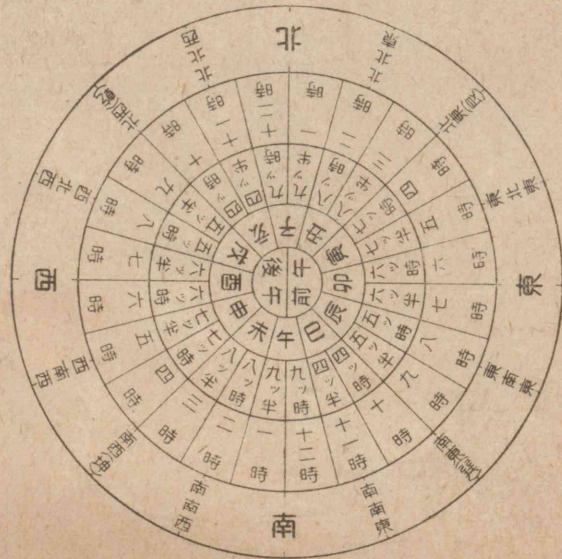


表 職 官

(のもるたしと本基を命實大)

他其	官	方	地	察 警 · 官 武				八	太	神	官
藏	國	大	右	檢	右	右	右	彈	太	神	官
人	司	宰	左	非	左	左	左	正	政	祇	職
所	府	府	京	違	馬	兵	衛	臺	官	官	等
頭	帥	大	職	使	寮	衛	門	臺	省	伯	長
五	守	夫	別	頭	同	督	大	尹	卿	官	官
位	介	亮	當	佐	助	同	將	弼	參	大	次
六	小	大	小	小	小	小	小	小	中	大	官
位	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	判
	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	官
	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	主
	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	典
	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	史

圖の時及び方位





35



昭和十二年七月廿六日  
昭和十二年七月卅一日  
昭和十三年一月十日  
昭和十三年一月十五日  
印刷  
發行  
修正再版印刷  
修正再版發行

新制國語讀本

定價 卷一—卷九 各六拾錢  
卷十 各五拾八錢

新東條國文

不許複製

編者

東條操

發行者

東京市神田區神保町一丁目一番地  
株式會社 三省堂

印刷者

東京市蒲田區仲六鄉一丁目五番地  
株式會社 三省堂 蒲田工場  
代表者 龜井豐治  
代表者 喜多見昇

發行所

(東京市神田區神保町一ノ一)  
振替口座東京三一五五五

株式會社 三省堂  
株式會社 三省堂 大阪支店

(大阪市西區阿波座下通二ノ六)



